

第3章 神奈川県庁舎設計コンペー等当 選者・小尾嘉郎とその他の入選者達

第3章 神奈川県庁舎設計コンペ一等当選者・小尾嘉郎 とその他の入選者達

神奈川県庁舎建築設計図案懸賞募集に入選した者達は、そのほとんどが無名であった。さらには、その後においてもいわゆる大家として名を残した者は土浦亀城だけであり、土浦以外の大半は歴史の波間に消えてしまっている。この章では特に1等当選者たる小尾嘉郎の人生を第1節で、その他筆者が調べ得た何人かについて第2節以下で論じることとした。

第1節 小尾嘉郎について

図3 - 1 八ヶ岳の裾野に広がる旧甲村（現高根町）



(1) 誕生と出自

小尾嘉郎（「おび・かろう」と読む）は1898年（明治31）5月20日に、山梨県北巨摩郡甲村字五町田493番地で、父・「小太郎」、母・「とよ」の長男として生まれる。従って、存命であれば筆者が彼の調査を始めた平成11年にはちょうど百歳になっていたはずだ。なお嘉郎の誕生日は戸籍上7月14日であり、自筆の履歴もそうになっている。しかし幼稚園、小・中校の卒業証書などはすべて5月20日になっている。推測であるが、実際の誕生日は5月であったが、戸籍上の届けが遅れるなどして、誕生の日を7月としてしまったのではないか、しかし今となってはその理由は不明である。

小尾家は元々かなりの素封家の家柄であった。甲村は五町田、上黒沢、下黒沢の三つの部落から構成されている。昭和37年に町村合併で、北巨摩郡高根町に変わっている。宇宙進化論で名高い天文学の小尾信也博士と、博士の兄で日銀を経て後大分銀行の頭取となる小尾知愛氏の兄弟もこの地方の出身である。

また大正時代、日本統治下の朝鮮にあって共に朝鮮人達から慕われた「朝鮮陶磁器の神」と言われる浅川伯教と朝鮮の植林や民芸の発掘に貢献した弟・浅川巧兄弟の出身地でもある。浅川兄弟生誕碑が町の公園にひっそりと建てられている。

とにかく旧甲村五町田から南隣の須玉町津金にかけて小尾姓が多い。¹⁾南隣の須玉町の地図を見ると、五町田や津金からはかなり離れているが、小尾という地名が塩川の上流、県道「原・浅尾・葎崎線」に沿って存在している。かつてこの周辺が小尾郷と呼ばれた名残である。小尾郷は塩川を挟んで、増富部落の東小尾地区と、神戸、御門、和田、黒森からなる西小尾地区の総称である。いずれも山峡の地で、耕作面積も狭小であるから、それほどの人口があったとは思えない。現在小尾郷に小尾姓は少ない。理由は後述する。

郷土史家の白倉唯行氏（須玉町大蔵在住）²⁾は「ふるさと地名考」（テレビ山梨刊）の中で、「小尾」は元々「帯」であって、塩川沿いに東小尾、神戸、御門、和田、黒森といった部落が細長く点在していたからとの説を言われている。なお以下の小尾一族に関する記述は白倉氏のご教示によるものである。

・小尾氏について

小尾氏は、戦国時代に武田信玄が領国経営において、普段は農業などに従事しながら、国境警備の任を務めさせた「国衆」の一族だった。特に高根町や須玉町の八ヶ岳山麓地域には、甲州から佐久地方に抜ける棒道（戦国時代の幅員約三メートル程度の軍用道路）がいくつか存在しており、信玄は上杉などの対信州における軍事重要拠点として、国衆の津金一族に支配させていた。現在も須玉町若神子から高根町五町田を抜けて信州に至る棒道が残っている。

角川・日本姓氏歴史人物大辞典によれば、武田氏の傍流である武田周防守貞冬が小尾郷に住したのが小尾氏の始まりとしている。小尾氏が武田の出自であるとする、清和天皇にはじまる甲斐源氏の血脈につながっていることになる。

この当時は移転した一族が姓を土地の名前に替えることはよくあった。小尾氏は元々独立した国衆であったが、その後の婚姻策などにより、津金一族に取り込まれる形になったものである。³⁾

さて、小尾郷に小尾姓が少なく、高根町五町田や津金に多い理由だが、実に天正9年の歴史的事実にまでさかのぼることになる。武田氏は天正9年3月に、信玄の四男勝頼が天目山の戦に破れて自害し滅亡してしまう。その後甲斐は織田家臣の河尻秀隆によって治められたが、翌天正10年6月に本能寺の変で信長が殺されると領国支配をめぐって北条と徳川が争うこととなった。これが天正壬午の乱と呼ばれるものだ。この戦で、津金衆と共に小尾祐光に率いられた小尾衆は徳川方につき、獅子吼城にこもる北条勢を攻め落とす軍功をあげた。⁴⁾

図3 - 2

小尾一族が軍功をあげた獅子吼城址（須玉町）中央の小山が城址
小尾郷の入口に近い



この恩賞として、天正10年9月7日に家康から小尾家は旗本に取り立てられ、一族には巨摩郡津金郷（須玉町）・根羽（高根町）・清水（甲西町）の内で本領六十四貫余、同郡村山郷（高根町五町田周辺）・比志郷（須玉町）・三蔵郷（明野村、韮崎市）に新たな知行二百八十貫文が安堵された。その結果小尾一族は新知行地に分散し、小尾郷はもぬけの殻となったのである。その後、旗本となった小尾本家がどこの地に移ったのかなどは今日判然としない。

小尾一族の本屋敷は、その名が示すように小尾郷の御門地区にあった。小尾郷御門地区内の正覚寺には、小尾衆十代の菩提碑が残っている。この碑はその摩耗度から見ると、幕末から明治期に小尾一族の子孫によって建てられたものである。⁵⁾

図3 - 3 小尾衆菩提寺の正覚寺小尾一族菩提碑（須玉町西小尾御門）



高根町は戦後観光開発された清里高原があることで知られているが、旧甲村地区は清里よりずっと海拔が低い位置にあり、高根町の中心市街地を形成している。中央自動車道の長坂インターから近く、北に八ヶ岳を背負い、はるか西に甲斐駒ヶ岳などの南アルプスを遠望する風光明媚なところである。また日照時間が長く、小河川が多いことなどから歴史的にも水田を中心とした農業生産高の高い豊かな土地柄であるという。

嘉郎が生まれた家は現在も残っている。長坂側から五町田の交差点を左折し（この道も先述の棒道だった）道祖神をいくつか見ながら八ヶ岳側に向かって5分ほど歩くと、樹木に囲われた瓦屋根の農家が数件立ち並んでいる所に行き着く。中程の一軒が生家である。現在は「現職を退いた後はこうした鄙びた家で暮らしたかった」と語る方が住まわれている。

囲炉裏の排煙のための小屋根がついた典型的な日本農家である。内部は大分改造されてはいるが、外観部分は当時のままと居住されている方は言われた。嘉郎の父・小太郎は平屋で約百坪近い家と、その敷地1反23歩（1,068㎡）を父親の俊平（嘉郎の祖父）から明治28年5月に相続している。俊平はここで養蚕業をしており、蚕棚があったとおぼしき屋根裏が残っている。

図3 - 4 小尾嘉郎生家（山梨県北巨摩郡甲村）



山梨の特産品と言えば、ブドウや水晶がすぐ思い浮かぶが、明治維新以降の山梨県産業の近代化に最も貢献したのは生糸生産であった。そしてそれを唱導したのが、明治6年1月に第五代山梨県令となった藤村紫朗である。

彼は、剛腕政治家として、後に自由民権活動家の糾弾対象となったりするが、しかし山梨の近代化に当たった功績は極めて大きい。その第一が製糸業を中心とする殖産興業政策である。その象徴的事業が甲府錦町（現在の甲府市丸の内、現県庁舎の南隣）にあった県営勸業製糸工場である。

第二は、こうした産業展開のための交通インフラ整備である。明治7年1月に藤村は「道路開通の告示」を出して、「財アル者八財ヲ出シ、財ナキ者八力ヲ致シ」と号令をかけた。これに呼応して、県内各地から道路開削願いが出され、藤村は道路県令の異名をもつこととなる。藤村の自由民権運動の弾圧者としての一面と、社会資本整備の功労者との一面を併せ持つ姿は、後に福島事件を起こす鬼県令として名を馳せた三島通庸とよく似ている。⁶⁾

この製糸工場の経済的成功は民間部門の製糸業転換への呼び水となった。ちなみに明治12年で見ると、山梨県内には10人繰以上の製糸工場は80以上となり、長野と岐阜に続いて全国3位となり、生産量では長野に続く第2位となっている。明治30年代になると、経営規模も大型化した工場ができる。国保村（現在の甲府市相生1丁目）の草薙社、鏡中条村（現在の若草町）市川大門村の甲州製糸が代表格で、特に草薙社は「千人繰り」と通称されていた。草薙社の巨大煙突については、後述する小学校時代の嘉郎の夏休み日記にも登場している。場所は荒川に架かる飯豊橋（明治の頃は西條橋と呼ばれた）脇であったが、⁷⁾今は住宅等の市街地となり大工場の面影の片鱗もない。

こうした製糸業の発展は、当然のことに養蚕業の広範な展開に支えられたものであった。明治21年で、養蚕農家は農家の約5割を占めており、桑畑は耕地の3割であったが、明治42年になると、養蚕農家は農家の七割弱、桑畑率は四割を超えて、全農産額の3分の1を繭が占めることになった。明治期の甲州農民は先を争って、野菜畑を転換し、荒蕪地を開拓して桑畑とした。藤村県令はそれを奨励していた。そして嘉郎の祖父俊平も、この繭生産で富を得た者の一人だった。

製糸業の発展は、明治36年に甲府まで中央線が開通した事とも符合している。絹の輸出先はその大半がアメリカである。従って製糸業の成否はいつにアメリカ経済に依拠

していた。明治30年の不況では中小工場の半数がつぶれたりしており、繊維産業のリスキーな面を示していることにもなる。

明治30年代の前半、即ち嘉郎の幼児期に一家は甲府に出る。甲村から転居して最初の住まいは、甲府市柳町2丁目10番地（現在の中央4丁目辺り）であった。柳町は江戸時代から続く甲州往還の宿場町であり、甲府舞鶴城の城下町の中心でもある。今日でも城東通りと呼ばれる道路に沿って、市内で最も殷賑性の高い地区となっている。この道路には間もなく身延山を経て静岡県富士宮市と甲府を結ぶ軽便鉄道が走ることになる。⁸⁾この甲府市内のいわば一等地に小太郎は借家を求め、洋服屋を開業する。商売は順調だった。

図3 - 5 父・小太郎と嘉郎



出典 小尾欣一氏提供

父小太郎と甲府市桜町の樋口写真館で撮影とある。小尾嘉郎は3歳位で明治34年の正月頃だろう。

小尾家親族の話には、父・小太郎は日清戦争後の好景気の頃、生糸相場にでも投資してうまくいかず、財産を失ったのではないかというものがある。親族の不確かではあるがと断られた上での証言であったが、今回の調査でその確証はつかめなかった。しかし明治期の甲州において、後述する若尾逸平のような稀代の豪商が、生糸相場を媒介に誕生しており、自分もと一攫千金を望む心理的背景が存在していたことは確かだろう。

父・小太郎は既に兄弟が甲府に出て、順調な暮らしを得ていたことから、都市での製糸関連経済活動で生業を立てようとした、そして繊維産業経済の波をもろにかぶり、経済上の有為転変があったことは事実である。自らの経済環境を記している青年時代の

小尾嘉郎日記にも相場の失敗があったとの記述はない。しかし大正のはじめには、この洋服店をたたまざるをえなくなっている。

大正2年に一家は甲府市富士川町23（現在の中央2丁目）に転居した。柳町から真北の方角に約4百メートル程のところ、近くを中央本線が通っていた。ここで小太郎は洋服屋を廃業して麻真田の製造に転じている。この間の資金調達のためと思われるが、故郷甲村の家屋敷を他人に売り渡している。麻真田については後述するが、これも結局大正7年から9年にかけての大暴落にみまわれて、失敗に終わる。

3回目は、無職となった小太郎が大正7年頃に西青沼町142番地（現在の丸の内3丁目）に転居したものだ。この地は、現在住宅密集地であるが、当時は地名が示すとおり、荒川近くの湿地帯が連なる寂しい所であった。

小太郎は色々と繊維関係の商売をするが、どうも商才があったとは思えない。しかし教養人であったことには間違いがなく、明治の家父長らしく振る舞い、息子達には古今東西の様々な話をしてあげている。また、奈良京都の神社仏閣にも造詣が深く、嘉郎兄弟は目を輝かせて父の話に聞き入った。嘉郎はこの怖い父が好きであり、また尊敬もしていた。このことは嘉郎が長じて、変わることはなかった。

また、母「とよ」は夫が携わる繊維関係の商売があまりに浮き沈みが激しいことから、子供達には技術（学問）を身に付けさせて、安定した職につけさせたいと考えていた。当時のこととて、特に長男である嘉郎には期待しており、厳しい経済状況の中にあっても嘉郎の勉学費だけはなんとか工面をつけていた。そして父小太郎も、最終的には嘉郎の絵画能力と物事に当たっての緻密で丹念な性格は、建築設計技師にふさわしいと考えるようになる。以下もう少し詳しく小尾嘉郎の少年時代を追ってみよう。

（2）幼稚園から小学校時代・天才少年

甲府に移転し、洋服店を開業してからの小尾家の経済状況は恵まれたものであった。事実嘉郎は明治37年に、当時山梨県内に一つしかない私立の進徳幼稚園に通っている。この年2月に日露戦争が勃発している。

大体第二次大戦以前で幼稚園に通園できた者は極めて少数派であり、況や明治期に子弟を私立の幼稚園に通園させること自体、その家庭の経済的ステータスを暗示させるものだ。

山梨県の幼稚園は、明治21年に県立師範学校附属小学校に幼稚科ができて、同27年に分離独立して師範学校附属幼稚園となったのがはじまりである。⁹⁾しかし財政上の理由などから同31年に廃止することが決まっていた。附属幼稚園の主任保母であった進藤都留は、地元財閥の総帥若尾逸平の学問所であった甲府市紅梅町（現在の丸の内1丁目）の一角2百坪を借り受け、「進徳幼稚園」を明治31年4月2日に開園した。保母

2名、代用保母1名、園児40名でのスタートだった。若尾逸平ほか地元有力者達は、進藤津留の人柄、幼児教育への姿勢に期待と信頼を寄せ、資金面の援助を惜しまなかった。

かくして明治37年7月には桜町通り北の角に、すぐに手狭となっていた園舎を移転新築した。嘉郎はこの年入園しているから、木の香も豊かな新築園舎ですごしたことになる。この時の園児数は90名ほどにふくれあがっている。

図3-6 若尾逸平



出典 山梨中央銀行HP

図3-7 小学5年生時の夏季休暇日記



図3-8 図3-7の拡大図

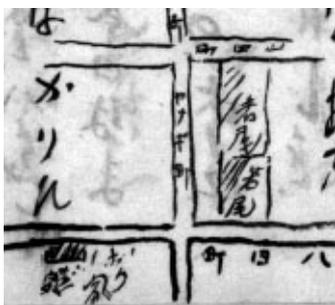


図3-7の棒線は先生が朱筆で文章を手直ししている部分。縦長に道路図が描かれているが、嘉郎の散歩コースを示すもので、現在の地図に当てはめてもかなり正確である。図3-8には「ボクノ家」と位置を示し、また近所に若尾の屋敷があったことも分かる。

なお、若尾逸平であるが、甲州人なら誰でもその名を知るところの裸一貫から甲州財閥の始祖となる立志伝中の人物である。若尾逸平は1820年（文永3年）巨摩郡在家塚村（現白根町）の貧農の子として誕生した。天秤棒を担いでの行商から始め、横浜開港以後甲州の生糸を横浜に運び、巨額の富を得た。明治11年に東京株式取引所が開設されるや、生糸で得た潤沢な資金を投資し、さらに巨利を手にする。兜町の主役となる一方、東京市街鉄道、東京電灯会社、などを次々に自己のものとしていった。初代の甲府市長となり、また貴族院議員にもなっている。¹⁰⁾この若尾に師事していた同県人に、小池国三がいる。後に小池は自分の証券会社を設立するが、会社のシンボルマークを若尾の家紋を採用した。平成9年に自主廃業した山一証券である。

図3 - 10の名簿には、左から4番目に小尾嘉郎の名前がある。出典は進徳幼稚園生徒名簿台帳（進徳幼稚園蔵） それ以外の出典は「進徳幼稚園創立100周年記念誌」

図3 - 12 明治38年3月小尾嘉郎卒園式



出典 進徳幼稚園創立100周年記念誌（3列目、左から3番目が小尾嘉郎）

進徳幼稚園は現在も存続している。昭和40年に甲府市湯村の地に移転し、平成10年には創立百周年を祝っている。今日山梨県内に幼稚園は64園を数えているが、進徳幼稚園は山梨県における幼児教育の先進幼稚園としての主導的立場に変わることはない。明治期に創設され、今日でも存続している幼稚園は日本全国でも10園程度しかない。

嘉郎は明治38年3月に卒園し、小学校に通うこととなる。ちなみにこの年5月には日本海海戦で日本海軍がロシアのバルチック艦隊を打ち破っている。

嘉郎が通った小学校は、山梨県師範学校附属小学校（現在の山梨大学教育人間科学部附属小学校）であった。明治42年まで、師範学校の場所は甲府舞鶴城近くの錦町官庁街にあり、県庁、警察署、裁判所、師範学校の順に並んでいた。師範学校は明治43年に西山梨郡相川村（現在の甲府市武田）に移転し、現在も山梨大学として場所は変わっていない。附属小学校は錦町時代師範学校の東側に隣接していたが、明治39年3月に郊外の寿町にある県立高等女学校に移転している。高等女学校は後の甲府第二高校となり、現在は甲府市下飯田に移転し男女共学の甲府西高校となっている。明治期の寿町は荒川沿いの、一面水田地帯の中にあり、嘉郎の自宅からは徒歩で30分ほどであった。現在県立女学校跡地は県民文化ホールとなっており、附属小学校は山梨大学のある武田に移っている。¹⁴⁾

今日、公立大学の附属小学校への入学は希望者が多く、抽選などの方式により選考されているが、明治の頃の入学はそれほど困難なものではなく、しかも経済困窮世帯の子弟は学費免除の措置がとられていたという。¹⁵⁾

嘉郎が文章や絵を書くことが好きな利発な少年だったことは、今も残る小学校時代の日記や作文がそれを証明している。4年と5年時の作文集を見ると、担当の先生は細かく朱書きで修文と評価をしているが、巧みな表現力に舌を巻いている様子がうかがわれる。そして作文集には、嘉郎の最初の俳句が記されている。

霜厚き石橋寒し梅の花

かり上げし田にただ一人かかし哉

これらに続いて、先生の評価が記されている。

「天才的の文章です。のびのびとしてみて現代の文章になれているのがうれしい。」

また別のところには、「小尾の文は実に小説的だ。いつもながら先生は小尾の文を読むとえも言へない感に打たれる。」と絶賛している。¹⁶⁾

また、夏休みの絵日記が秀逸である。夏休み期間は今日と同じく、7月21日から8月31日までである。和紙を二つ折りにして丹念に筆で記述したもので、その文章力と、巧みな絵の才能には並々ならぬものがあったとわかる。以下日記文そのものの抜粋は資料編に載せている。

(3) 明治43年夏

・水害

この日記には、明治末期の庶民の暮らしぶりが生き生きと描写されている。柳町の「小尾洋服店」は2階建ての商家であり、おちかという名前の女中と小僧2人(久造と巳義と記されている。)を雇い、経営は順調だった。特に明治43年の夏には、二つの歴史的な事件があったが、日記にはその事実が明確に記録されている。一つは首都圏から東北地方を襲った集中豪雨であり、もう一つは日韓併合である。絵日記はこの事実の証言者である。前者の集中豪雨は最近NHKが刊行した「二十世紀日本大災害の記録」(NHK情報ネットワーク、2002年6月)にも取り上げられているものだ。少し長いがその日の様子は資料編に採録してある。なお、日記の中で、「八ちゃん」とは次男の八郎、「菊ちゃん」とは三男の菊造のことで年齢はそれぞれ2歳ずつ違っていた。

日記には関東東北地方を襲った集中豪雨の甲府における庶民の様子が、一小学生の目から描かれているが、この8月10日の水害は明治40年に続くものだった。この集中豪雨による被害は東海、関東、東北地方と広範囲に及び、全国で44万3千戸が被害をうけている。また「二十世紀日本大災害の記録」では、この豪雨は台湾付近で発生した台風と梅雨前線が合体したことによるもので、全国で死者行方不明1,379人、堤防決壊7,266カ所、浸水面積446,897ヘクタールに及び、東京では神田川、多摩川等の河川が氾濫し、板橋、牛込、戸塚、大森、羽田などの地区が濁流に吞まれたと記している。勿論神奈川も甚大な被害を受けている。なお3年前の明治40年の水害について、「山梨県の地名」(日本歴史地名大系、平凡社、1995年11月)は次のよう

に説明している。

殖産興業政策による製糸業の振興は、養蚕における温暖飼育のための樹木乱伐を招き、山林の荒廃が進んだ。森林の保水力の低下は水害の頻発を呼び、中でも明治40年8月22日から26日にかけて山梨県全域で降り続いた雨により、中小河川は各地で氾濫し、笛吹川は石和付近で川筋を変えてしまった。県下では死者232人、倒壊・流失家屋11,923戸、流出耕地764町歩、被害額1,300万円に達し、「災後の甲州は最後の甲州」と言われた。

明治43年の大水害の後、山梨県では県民大会が開かれた。そして被害の原因が森林の荒廃に基づくもので、当時乱伐されていた御料林を県に還付するよう決議している。明治政府は要請を受け入れたのだが、時代はずっと下って第二次大戦後に、この明治44年に県に下賜された恩賜林の記念館を嘉郎が設計することになる。

この水害は甲斐地方の風土病として恐れられていた「日本住血吸虫水腫」の蔓延をもたらしている。勿論明治期の頃は原因が分からず、腹が膨満して苦しみぬいて死に至る病気で、「はらっぱり」と呼ばれていた。山梨県がこの病気の収束宣言をしたのは、実に最近の平成5年である。

・日韓併合

次は明治43年8月23日火曜日の日韓併合についてである。原文はやはり資料編に載せている。当日は号外が配られ、日韓併合を祝った歌を嘉郎兄弟は歌いながら、舞鶴城公園に遊びに行っている。どのようなメロディだったのか興味深いところではある。

この年の前年、明治42年の6月に、3年半に渡り韓国統監として朝鮮半島を実質支配した伊藤博文は、統監職を辞任し枢密院議長となった。そして10月26日、伊藤は満州視察の途中、ロシア東清鉄道ハルビン駅において安重根に狙撃され死亡した。明けて明治43年7月6日、第二次桂内閣は韓国併合を閣議決定し、天皇はその日の内に裁可している。日韓併合の準備は極秘の内に着々と進み、「韓国皇帝陛下八韓国全部二関スル一切ノ統治権ヲ安全且永久ニ日本国皇帝陛下ニ譲与」との韓国併合条約が8月22日に調印された。嘉郎の記述どおり、韓国皇帝一族は皇族待遇となり、王族や政府高官は朝鮮帰属令によって公・侯・伯・子・男の爵位が与えられた。新聞は号外を出し、各所で提灯行列がなされた。明治末年のこの頃は富国強兵策の下で日清・日露の両戦争に勝利し、歴史的に日本ナショナリズムが最も高揚した時代であった。

この集中豪雨と日韓併合にはリンクするところがある。それはこの豪雨被害で田畑財産を失った一部の者達が生活再建を期して、朝鮮半島に移住しているからだ。勿論南米ブラジルをはじめハワイ等への貧農が移民する動きは以前からすでに始まっていた。明治40年にはアメリカから移民制限についての要請に、林董外相は実行方法を回答するなどしている。しかし朝鮮の場合は南米の未開ジャングルを開拓するのと違い（それでも南米やアメリカ現地住民の反日感情が起こっている）朝鮮人が中国に移住し、日本に逆流する結果を呼び、反日から抗日運動へと連鎖するのである。日本が本格的帝国主義国家となるいわば元年の年であった。

嘉郎の日記は、その時代の雰囲気伝える庶民の側からの証言でもある。

この数日後、掃除をしている際、嘉郎がおもちゃを弟の八郎の足に落としてしまう。心やさしい兄として「ごめん、ごめん」とあやまった後、次のように言う。

「なにこれ位、日本男子だ。大丈夫だ。今に戦争に行くのだ。」

この行に先生は赤丸をつけている。また巳義と言う名前の丁稚小僧がいたことが分かる。嘉郎も無意識で小僧と見下した表現をしている。そしてこの小僧が荷物をまとめて、実家に逃げ帰ったことを日記は克明に記している。

そして日記の最後に先生の評が朱筆で次のように書かれている。

「評、暑中休暇中の出来事がありありと記されていました。そして中々の才筆で、先生も亦面白く読みました」

これを記述したからといって、将来小尾嘉郎が右翼的軍国主義者になる萌芽があったということではない。嘉郎の人となりは時代社会に純朴に反応する、まったき一庶民の典型だった。この後甲府中学（現在の県立甲府第一高校）へと進学するが、多種の本を読み、奈良・京都の神社・仏閣に心ひかれ、また短歌や俳句を趣味としたのも、父・小太郎の影響を強く受けている。中学に入ると、小太郎は将来の進路として嘉郎に建築技師となることを勧め、また嘉郎もはっきりと将来の道は建築、と心に決めるようになった。

嘉郎の思想は特に右左ということもない。しかし弱い者へのいたわりの心は強く持っていた。それは病弱だった二人の弟を思いやる言葉が日記に見られるとともに、和歌の中にも、貧困の象徴たるスラムの存在を悲しいことと思う心情を読んだものが存在している。また戦後の時代にあっても、政治についてはどちらかと言えば心情的に社会党を支援していた。¹⁷⁾

・軍旗祭・ベースボール・クリスマス¹⁸⁾

明治43年も暮れの12月25日、学校は冬休みになった。この日嘉郎は友人と甲府第49聯隊の軍旗祭を見に行った。軍旗祭とは、聯隊に軍旗が下賜された日を祝って行われた祭典のことで、この日に限って一般市民に聯隊敷地が開放される。兵士にとっても、日頃の厳しい教練から解放される憩いの日だ。質は違うが、ちょうど大学祭のようなものと考えたらよいだろうか。

甲府聯隊は日露戦争時の明治38年に、樺太方面への配備のため編成されたもので、山梨県や甲府市の誘致運動により上府中の西山梨郡相川村に置かれることになった。用地は明治41年に若尾財閥が買収して陸軍省に寄付したものだ。兵営の建設が終了し、翌42年には山梨、神奈川の兵3千人が駐屯することになる。

聯隊駐屯地招請の経済効果は絶大である。まず増山町（現朝日町と武田町の一部）から穴切町に移転した遊郭が栄えた。なお今日穴切遊郭は消滅して、閑静な住宅街となっている。そして兵士達の遊郭までの通り道に当たる商店街や飲食店街が発展した。後に大正13年と昭和6年には聯隊が横浜へ移転するのではとの懸念から、猛烈な移転反対運動がなされている。

さらに後日談を言えば、この甲府第49聯隊は昭和11年の2・26事件の際に鎮圧部隊として上京し、治安が回復するやその年末には全員が満州に出動、ソ満国境付近の

最前線に駐屯した。昭和12年には、あらためて甲府聯隊は第149聯隊として各県からの初年兵や応召兵との混成部隊として組織された。通称「津田部隊」と呼ばれたが、中国戦線で多くの戦死者を出した。ちなみに、鎌倉市の光明寺には「津田部隊・笹島部隊戦没勇士之忠魂碑」が残っている。その後太平洋戦争の苛烈化と共にグアム島やレイテ島に派遣されるなどしてほぼ全滅してしまうことになる。

戦後跡地は文教地区として整備され、現在は山梨大学及び附属の小中校、市営住宅、国立病院などが立地している。明治43年と言えばまだ駐屯開始してまだ2年目であり、日露戦争終結後の平時であることから、軍旗祭もゆとりのある雰囲気のものであった。嘉郎の日記からこの日の様子を見てみよう。

嘉郎は午後から弟二人と友人とその弟の計五人で上府中に出掛けた。普段は寂しい場所柄であるが、この日ばかりは大変な人だかりとなっていた。入り口で不動の姿勢を取る番兵の顔もなんとなくおだやかに見える。敷地内には万国旗が飾られ、各中隊が出し物を出し集客を競っていた。あちこちで軍人達が三々五々談笑している。

嘉郎達はまず馬屋に行き、軍馬を眺めた。そこを出ると第九中隊の「動物園」なるものがある。入ると大きな猫が繋がれている。傍らの解説に「鍋島の猫騒動に活躍したる者」と書かれている。

七面鳥と書かれているコーナーでは、お面が七つと手斧が置かれているだけである。イタチとあるのは板に羊の血がついたもの、凧が蛸、お菓子の缶が「前九年の役の雁」、鯨尺の物差しが鯨と、まるで子供だましの駄洒落の連続であるが、嘉郎達は笑い転げた。

「動物園」なるものを出ると、二本の柱が立ちそれぞれの頂部には天秤状に横木が置かれ、横木の先端部にはなにやらぶら下がっている。一本目は鳥の羽根と「死」と書かれた紙が対称につり下げられて、鳥の羽根側がやや下がっている。またもう一組には「義」と書かれた紙と山の絵が書かれた紙がぶら下がっており、やや「義」の文字側が下がっている。この解説は「天皇陛下のために死ぬことは鳥の羽根より軽く、義は山よりも重い」とあった。

第11中隊には鯉の滝上りの飾り物や日本兵がロシア兵を殺している人形があった。飾り物の上には、銃、一羽の雀、鯛とが描かれた紙が張られている。これは第11中隊と読ませる判じ物になっていた。

このほか西郷隆盛や楠正成の飾り物、また軍旗そのものを見て、最後に角力会場に至った。兵士が行司や相撲取りの格好をして、5人抜き勝負を行っていた。嘉郎兄弟を含め観客は大興奮の内に観戦した。角力を見終わる頃には既に夕闇が近づいており、帰宅時に日はどっぷり暮れていた。

この時期、まだ日露戦争の勝利から日が浅く、軍人は庶民から畏敬の念をもって見られていた。いわんや男の子供達は憧憬の眼差しで見えていたであろう。素直な嘉郎は率直にそうした気持ちを日記に残している。

翌12月26日の午後は学校のグラウンドに野球見物に出掛けた。二人の弟も一緒であった。日本における野球事始めには諸説あるが、明治維新と共にベースボールはすぐに日本にやってきたことは間違いない。そして一高の生徒が校技(国技をもじった)として熱心にとりいれた。明治30年代にはすでに主要中学に普及して、明治末年にもなる

と全国に広がっていた。元々日本には剣道、柔道のような個人同士で競うものはあったが、団体競技は存在していなかった。団体競技の持つゲームの面白さと、フォアザチームの精神は高揚する国粹主義とに合致して、日本の若者の心を一挙に捕らえた。嘉郎の絵日記を見ると、この頃小学生もすでに今日的ユニフォーム（ニッカボッカスタイルだが）でプレイしている様子が分かる。

図3 - 1 3 夏期休暇日記の表紙

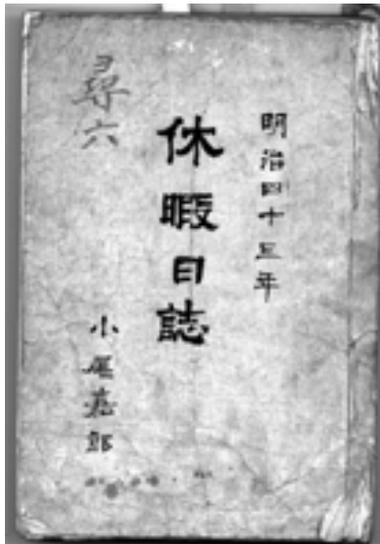


図3 - 1 4 野球の様子



日記は和紙とこよりでしっかりと装丁されている。

図3 - 1 5 軍旗祭りの様子



軍人の偉そうに歩く姿が面白い。左のページには命が鳥の羽より軽いことを示す天秤が描かれている。いずれも出典は明治43年冬季休暇日記で神奈川県立公文書館所蔵。

・機山館

明治43年12月25日の夜は、舞鶴公園にあった機山館に友人2人と出掛けた。この夜は外人宣教師によるクリスマスの催しがあり、オルガン演奏や聖書の話しを楽しんだ。帰宅は夜中の12時になっていた。

図3 - 16 機山館



出典 ふるさとの思い出写真集・明治・大正・昭和、国書刊行会

機山館周辺は嘉郎兄弟のよい遊び場であった。機山館は舞鶴城内旧稻荷曲輪（現天守台下県青少年科学センターの位置）にあり、明治39年9月1日に開館している。第16代県知事・武田千代三郎が予算5万円で建設したもので、当時の山梨県としては最大の広さを誇っていた。瓦葺きのルネサンス様式で、地上二階建て、延べ330㎡、各種展覧会会場としてや毎年の徴兵検査会場に使用された。また時に皇族宮家の宿舎にもなった。山梨の鹿鳴館といった趣の建築である。設計者等は不詳。¹⁹⁾

なお、「機山」とは武田信玄（武田大膳大夫春信入道機山）の法号である。現在東京の本郷に同名のホテルがあるが、何の関係もない。機山館は昭和7年5月に教育会館として県庁構内に移築されたが、間もなく焼失してしまう。

（4）明治44年

明けて明治44年の元旦、嘉郎は小学生として最後の正月を迎えた。嘉郎の冬季休暇日記によれば、この日は晴天であった。朝、小尾家の五人は畳の間に集まり正月のご馳走をぐるりと囲んだ。子供達は両親に「あけましておめでとうございます。」と挨拶する。まだ幼い三男の菊三は、まだたどたどしい口調で兄達にならった。母はまず夫・小太郎の銀杯に屠蘇を注ぎ、続いて三人の子供に順次注いであげた。白く湯気の立ち上る雑煮を食べ終わり、嘉郎はすぐ学校に行く。校長の訓辞や「君が代」の斉唱、教育勅語の奉

読などで新年の式は程なく終わった。

帰宅しようとしていた嘉郎は、親友の小沢少年から「小尾君、君の作文が新少年の小品文で一等になっているらしいよ。」と知らされた。「新少年」とは少年少女達からの作文を募集して、優秀なものを掲載する極めてまじめな小雑誌である。発行所の新少年社は甲府市百石町（現在は甲府市丸の内）にあった。

なお、「新少年」と称する雑誌は明治維新以降何種類か発行されている。最も著名なのは戦中戦後にかけて弘文社が刊行した漫画誌で、手塚治が作品を寄せていることで知られている。また農民詩人の白鳥省吾が、大正3年から刊行した同名の詩の雑誌がある。この甲府市から刊行された「新少年」の販売範囲は山

梨県内を中心とするかなり狭い範囲のものである。掲載している広告もほとんどが甲府市内のものであることからそれと知れる。たまたま神奈川県立近代文学館が所蔵していたのは筆者にとって僥倖だった。

嘉郎は小沢と共に百石町に駆けつけ、正月号を手にした。小品文一等の賞品として、2ヶ月分が無料になっていた。嘉郎は急いで帰宅し、両親に見せた。めったに子供を誉めない父小太郎は、嘉郎の頭をなぜながら「えらいぞ」と言った。懸賞小品文で一等となった小文等は第5章資料編に載せている。

図3 - 17 新少年



明治44年1月号
(神奈川県立近代文学館所蔵)

この雑誌をみると、嘉郎の作品は和歌が一点、俳句が一点、作文が二点掲載されている。佳調とされた和歌は次のものである。

馬子歌のゆるく聞ゆる夕ならいづこともなく梅が香ぞする

元日や晴れて一輪梅の花（この句は秀逸となっている。筆者注）

嘉郎の文章の選者は「いつもうまいものだ。」と評しており、嘉郎は投稿の常連だったことが分かる。事実前年の明治42年8月2日の暑中休暇日記に、「暮色」という表題の投稿文が新少年に掲載され大喜びしたとの記述がされている。残念ながらこの現物は発見できなかった。それにしても大変な文章力である。明治期の優秀な少年達は総じて早熟と言われているが、これらの文章は早熟の域を超えて、何かニヒリズムあるいは実存主義的な香りすら感じさせるものだ。

ところで、嘉郎が通った附属小学校の本体である山梨県師範学校であるが、かつて甲

府市錦町にあった頃の建物がいわゆる「藤村式建築」と呼ばれる擬洋風建築の一つであった。擬洋風建築とはコンドルによって本格的西洋建築がもたらされる以前の、幕末から明治初期に大工の棟梁達が西洋館を見よう見まねで建築した和洋折衷の建物である。第2章の国会議事堂コンペで記述したが、大熊喜邦は応募作品のいくつかに「大工式」があったと記しているが、これも擬洋風建築のことであろう。

最も著名な棟梁は築地ホテル（明治元年）や第一国立銀行（明治5年）を手がけた二代目清水喜助であり、大蔵省営繕寮で多くの官庁建築を手がけた林忠恕である。二人は文明開化の横浜におもむき、後に神奈川県庁舎としても使用される横浜税関庁舎を設計したブリッジンス（後述）の下で西洋建築を学ぶ。これら当時最新式の建築様式は新し物好きの棟梁達によって日本各地に拡散する。

そして山梨県の第五代県令藤村紫朗は、明治6年から愛媛県に転任する明治20年までの16年間、殖産興業の振興に努めると共に棟梁小宮弥太郎等に県内各地に擬洋風の公共建築を作らせる。棟梁小宮弥太郎の顕彰碑が甲府市内の妙遠寺境内に建っている。また嘉郎の生誕地甲村に隣接する須玉町には擬洋風建築の津金学校が町の郷土資料館として今も保全されている。

図3 - 18 初代山梨県師範学校



図3 - 19 2代目師範学校



出典 山梨の洋風建築、甲陽書房

これら山梨県内の擬洋風建築は昭和初期の頃から誰言うとなく藤村式建築と呼ばれるようになった。嘉郎一家が住んでいた柳町には、明治7年に学制発布以来最初の学校「梁木学校」が建築されていたが、これが琢美学校と並んで最初期の藤村式建築であり、後に甲府市役所に転用されている。山梨県は擬洋風建築の宝庫であった。²¹⁾ 当時としては最先端の建築であり、そうした土壌が小尾嘉郎をして、いつしか建築家になることを夢見させるようになったのかもしれない。

（5）中学時代

明治44年3月に小学校を卒業するが、すでに県立甲府中学校（現在の県立甲府第一高校）を受験・合格しているが、すぐに学級副委員長となっており、上位の成績で合格

していたと推定できる。この頃の甲府中学は現在の舞鶴城公園内にあった。当時の父・小太郎の職業であるが、大正2年前後に柳町の小尾洋服店をたたみ、当時活況を呈していた「麻真田」製造業に転じている。この時資金繰りのため、本籍地であった北巨摩郡甲村の家と土地を人手に渡している。そして住まい兼工場を富士川町に求め引っ越した。²²⁾結果論だが、この転業は失敗であった。

ところで麻真田(あささなだ)であるが、マニラ麻の優良繊維を真田に編んだもので、婦人用帽子の材料のことである。真田とは元々組み紐の編み方の一種で、真田幸村が刀の小束に愛用したことからこの名がついたと言われる。実際には中国の漢から渡来したもので、正倉院に真田紐の御物が残されている。明治10年の内国勸業博覧会において麦藁真田帽子が工産物として評価され、麦藁真田は輸出産品として花形商品となった。その後、真田の原材料が経木から麻へと変遷する。

明治から昭和にかけての、有力商品となった麻真田の発祥の地は実は横浜であった。「横浜市史稿産業編」によれば、何人かが商品化に失敗した後、南吉田町の上瀧七五郎が電気動力を使用した麻真田の製品化に成功し、明治42年に初めて輸出された。大正初期には麻真田生産の組合が横浜にできる。原材料のマニラ麻は横浜港から入荷され、加工された麻真田は欧米各国へやはり横浜港から出荷された。取引のピークは欧州大戦初期の大正5年あたりであったが、突如大正7年から需要が落ち込み、同9年にはどん底状態となり、多くの製造業者が倒産した。ちょうど小尾家の経済の落ち込みと符号する。

大正12年の関東大震災で横浜港が打撃を受けて、麻真田取扱高日本一の座を神戸に譲ったといった記事が大正14年6月19日の横浜貿易新報に載っている。生産地は既に全国的に拡大していたが、横浜のほか神戸、新潟の柏崎市や小千谷、愛知県の豊橋、東京大森が盛んであった。大半は零細な業態で生産され、農家の賃仕事にもなっている。しかし昭和に入ると工業の近代化と共に急速に衰えて、戦後にはほとんど消滅してしまい麻真田は死語同然となっている。

ところで当然のことながら、山梨県の繊維産業とその貿易港としての横浜の結びつきは強いものがあり、それは我が国の鉄道の歴史とも重なる。明治20年代に、先に述べた甲州財閥の総帥で貴族院議員となっていた若尾逸平や製糸業者達は、中央鉄道期成糸連合会を結成して中央線(現JR中央本線)の敷設運動を起こした。勿論ねらいは横浜への鉄道シルクロードの設置である。明治25年の鉄道敷設法によって、中央線は国土の中央縦貫路線として軍事面からの評価も高かったことから第一期線とされた。明治29年から八王子・甲府間の工事が開始され、笹子トンネルなど難工事を克服して明治36年6月に新宿から甲府までが開通した。

ちなみに横浜側であるが、信州や甲州の生糸は、中央線から東京経由で横浜に輸送されていたため、何とか八王子から直接横浜に結ぶ鉄道が望まれていた。原善三郎らが運動して、明治41年9月に現在の東神奈川・八王子間の横浜線の前身「八浜線」が開通している。これが鉄道シルクロードの完成だった。原善三郎はちょうど甲斐の若尾逸平に相当する生糸で財をなした豪商である。

善三郎は文政10年4月28日に埼玉県児玉郡渡瀬村(現在は神川町)に生まれ、開港間もない文久元年に横浜出る。明治7年には為替会社を改組して第二国立銀行を設立

して頭取となった。神奈川県庁近くの弁天通りに亀屋なる生糸商店を構え、善三郎は亀善と呼ばれ当時の狂歌に「横浜はよきもあしきも亀善の原ひとつにてこと決まるなり」とまで謳われた。現在の三溪園は明治元年に本牧に別荘を建てたものを入り婿の原富太郎（慶応4年8月23日生まれ、旧姓青木富太郎、岐阜県厚見郡佐波村出身、後に三溪と号した）が明治39年に市民に公開したものである。

善三郎は県会議員、市議会議長、埼玉県選出の衆議院議員、貴族院議員、横浜商工会議所の初代会頭などを歴任し、明治32年2月6日七十二年の生涯を閉じている。また富太郎は義父から受け継いだ生糸商を海外に拡大し、さらに事業を発展させた。大正9年には横浜興信銀行（後の横浜銀行）の初代頭取、関東大震災後の復興委員長になっている。富太郎は岡倉天心と親交があり、日本美術院の評議員となり小林古徑、前田青邨、安田靫彦らの生活支援を行うなど文化芸術面でも活躍している。昭和14年8月15日に70歳で死んでいる。

麻真田製造の経営は第一次大戦後の好景気で順調に思えたが、突如大正7年から大暴落する。零細な製造業には致命的であり、小尾兄弟は修学旅行も経済的理由で諦めなければならない程だった。既に小太郎は事業を再建する意欲を失っていた。大正7年には工場をたたみ、甲府市の郊外の西青沼町に転居する。この地は現在でこそ、住宅が密集した地域であるが、当時は水田や湿地が周囲を囲むいかにも寂しい土地柄の所であった。小太郎夫婦の金銭をめぐる争いも絶えなかった。しかしこんな厳しい経済状態にあっても、嘉郎の浪人生活だけは支え続けた。

嘉郎、八郎、菊三の兄弟はいずれも優秀であったが、とりわけ次男の八郎は学年トップの成績であった。教育熱心であった母親は、特に八郎の夭折を悼んだという。²³⁾ 三男菊三は大正10年に、八郎は大正12年に共に先天性の心臓弁膜症により亡くなる。

図3 - 20 次男八郎の甲府中学学生手帳

考備	学年	學期第二	學期第一	學期	學科
	甲	甲	甲	身	修國語及漢文
	甲	甲	甲	身	英語
	甲	甲	甲	身	算術
	甲	甲	甲	身	理科
	甲	甲	甲	身	地理
	甲	甲	甲	身	歴史
	甲	甲	甲	身	算術
	甲	甲	甲	身	物理
	甲	甲	甲	身	化学
	甲	甲	甲	身	生物
	甲	甲	甲	身	衛生
	甲	甲	甲	身	図画
	甲	甲	甲	身	音楽
	甲	甲	甲	身	体育
	甲	甲	甲	身	総合
	甲	甲	甲	身	その他

欠席届	欠席届	欠席届	欠席届	欠席届
大正 七年 九月 十五日	大正 七年 十月 十五日	大正 七年 十一月 十五日	大正 七年 十二月 十五日	大正 八年 一月 十五日
欠席	欠席	欠席	欠席	欠席
理由	理由	理由	理由	理由
修学旅行	修学旅行	修学旅行	修学旅行	修学旅行
...

出典 小尾八郎の甲府中学学生手帳（神奈川県立公文書館蔵）

左は学年トップの成績を示し、右は経済上の都合で修学旅行は参加できない旨の記載がある（大正7年）

図3 - 2 1 小尾3兄弟



出典 小尾欣一氏提供（右から次男・八郎、長男・嘉郎、三男菊三）

（6）初恋そして卒業

大正6年3月に甲府中学校を卒業する。卒業の前年から嘉郎は熱烈な恋をする。相手は同年齢で、甲府市内在住の厳格な家庭で育てられている子女であった。名前は「清水きく」といったが、嘉郎は「きいちゃん」の愛称で呼んでいた。弟の菊三の愛称が「菊ちゃん」だったため、「きい」としたのだろう。見初めたのは16歳の、大正4年4月、桜咲く善光寺境内と日記にある。嘉郎が愛読した夏目漱石の「永日小品」という作品に「喜いちゃん」なる少女が登場しているが、偶然の一致か。

善光寺は甲府駅の東方一キロ半程度に位置し、JR身延線で甲府から二つ目の「善光寺駅」から徒歩で行ける。浄土宗知恩院の末寺で、長野善光寺が武田信玄と上杉謙信との合戦時に炎上し永禄元年全山甲斐のこの地に移ったのが開山のいきさつである。巨刹であり、今日でも出店、茶店が参道に並んでいる甲府市民憩いの場であるが大正期はさらににぎわっていた。

彼女は小柄で可愛い女性と日記は記している。筆者はちょうど時代設定が一致する「おしん」をイメージする。小尾家には若い女性とおぼしき写真が相当数残されていたが、ほとんどが劣化して判別不能であった。嘉郎が苦しい胸の内を彼女に告白したのは、大正5年4月4日の夜であったと日記にある。

この時彼女は「又話すべき場合も御座いませうから」「それではなんとかきつと御返事致します」と語るが、一向に手紙はこない。そしてこれが嘉郎を苦しめる。日記にははっきりした理由が書かれていないが、この年受験自体していない。父親の麻真田経営上

何かゴタゴタがあったと推定できる。そして8月に受験勉強のため上京、暮れに甲府へ帰郷する。

あけて大正6年(18歳)の春、勉学のため上京下宿する。場所は「東京市神田区今川小路2丁目1番地村木館」であった。神田にはすでに予備校があり、ここに通ったと思われる。嘉郎はこの間「きいちゃん」への思慕の情と手紙のやりとりを日記に克明に記しており(しかも手紙そのものを書き写しており)この間の状況が手に取るように分かる。

手紙には、彼女から東京で何をしているかとの手紙の間に答えを書いたものがあり、嘉郎の誕生の地が北巨摩郡であることや当時の小尾家経済状況の厳しさが分かる。また今後の手紙は女性名で出してほしいと言われる旨の記述もあり当時の男女交際の困難さがしのばれる。

なお後日談であるが、筆者が平成13年の秋にご子息の欣一教授宅を訪問した際のことであるが、教授が「小屋を片づけていたら古い手紙の束が見つかりました」と言われた。それら宛先は小尾嘉郎となっていて、差出人は男女取り混ぜいろいろの名前があるが、中身はすべて「きく」さんからのラブレターであった。

また嘉郎は文学青年でもあった。島崎藤村、高山樗牛の詩や夏目漱石の小説などを数多く日記に引用している。6月3日、待ちに待った彼女からの手紙がくる。東京府下雑司ヶ谷字亀原からだった。

「前略 早速御返事有難うございました。二十八日拝見致しまして、其の翌日上京致しました。何事も秘密でございますから気もおちつかず、又方がくもわかりませぬ故にたづねも致しませんでした。私ぜひ明夜は御伺ひ致したいと存じます故、失礼ながら七時より八時頃まで表に出て御居で下さるわけには行かないでせうか。それよりおくれてもかならずありますからその折り色々御話致します。

乱筆お許し下さい

かしこ

嘉郎様 御許」

6月4日、彼女は夜9時半頃友人一人を伴ってやってきた。三人は神保町から路面電車で江戸川橋まで行き、鶴巻町に立ち寄り友人は帰る。音羽から護国寺までの約一キロが束の間のデートコースとなった。この日の会話を嘉郎は詳しく日記に残しているが第5章に譲る。

純情で一途な嘉郎の思いに、彼女は必ずしも正面から応えてくれない。いらだち懊悩する心情が連綿と日記に綴られている。しかし当時の慣習からして、既に彼女は結婚適齢期であり(あてにならない嘉郎の大学卒業までの数年間は待てないとの彼女の打算を誰も非難できないだろう)家族制度の桎梏から脱皮できない日本女性と、藤村や樗牛そして漱石を愛読し近代的自我に目覚めた若き青年とのどうにもならない壁があった。そうは言っても若い嘉郎の燃えたぎる血潮の叫びと受験生(浪人)という立場、孤独な生活、そのはけ口は日記にぶつけるしかなかった。この大正6年7月に金沢の第4高等学校を受験するが、失敗に終わっている。

あけて大正7年の正月を迎える。19歳である。嘉郎の悩みには家庭問題、即ち両親との確執も加わっていた。具体的なことは分からないが、日記には母親を非難する言葉

が残されている。多分「きく」さんとの恋愛に反対されていたのだろう。大正7年1月11日の日記では恋愛の方が好転したことを記している。

(7) 名古屋高等工業学校入学

大正7年の春、嘉郎は名古屋高等工業学校建築科に入学する。ご親族の証言では、嘉郎は東京高等工業にも受験・合格していたが、すでに名古屋高等工業の入学手続きを済ませていたため、当時の制度では東京高等工業の入学は許されなかったらしい。あれほど東京にあこがれていた本人には必ずしも本意ではなかった。しかしもはやこれ以上浪人生活が許される状況ではなかった。

名古屋高等工業は明治38年に創設され明治41年に最初の卒業生41人が社会に飛び立っているため、嘉郎は14回生ということになる。ちなみに東京高等工業は明治14年に開校した東京職工学校に端を発して、明治35年に東京高等工業学校となり建築科が設置されており初期の指導者に前田松韻がいた。前田松韻は満州に渡った建築家の第一号として、またアール・ヌーボ様式を得意とした名手としても知られている。

この当時名古屋高等工業の建築科長は夏目漱石の義弟に当たる鈴木禎次であった。悪妻と言われた漱石の妻が、鈴木の子だった。漱石の小説にも鈴木らしき人物が描かれている。鈴木禎次は明治3年7月6日に静岡県豊田町の裕福な銀行家の家に生まれ、明治29年に東京帝国大学工科大学造家学科卒業し、三井臨時建築係となる。明治35年から39年にかけて文部省派遣留学生としてイギリス、フランスに学び、特にフランスの新古典主義の影響を受ける。帰国後辰野金吾の指示で名古屋高等工業学校教授となり、大正10年退任するまでの15年間建築科長を勤める。鈴木のアーキテクト養成にける熱意は強く、その教育態度は峻烈なものであった。²⁴⁾また教育者としてばかりでなく、設計の実務も数多くこなしており(当時はこうしたアルバイトに対してゆるやかな時代だった)松坂屋は代表例である。横浜の伊勢佐木町にも鈴木的设计になる松坂屋横浜市店(旧野澤屋)が残っている。

嘉郎の設計技術は確かなものとして、鈴木に認められていく。なお嘉郎の8年先輩に中村順平(明治43年卒業)がいた。中村は鈴木の子弟子といわれており、卒業後曾根・中条建築事務所に入り、大正博覧会、北海道博覧会、如水会館などを担当した。大正9年に岩崎財団海外派遣留学生としてフランスのボザール(国立最高美術学院)に学ぶ。大正12年に日本人として初めてフランス政府公認建築士の称号を得る。大正14年から、横浜高等工業(現在の横浜国立大学工学部)の開校とともに建築科の主任教授となる。後に皮肉なことに嘉郎デザインの神奈川県庁舎案を酷評することとなる。

嘉郎が入学した大正7年の卒業生に、松田軍平がいた。大正12年コーネル大学を卒業し、帰国後東京室町の三井本館の工事監理を行い、その後設計事務所を開業する。昭和31年日本建築設計監理協会が日本建築家協会に改組・改名した時の初代会長となっている。またこの年には校長として、武田五一が赴任してきた。嘉郎は恋に悩みながらも、設計技師としての技量を確かなものとしていった。しかし名古屋での生活は必ずし

も満足出来るものではなく、学校教育自体にも内心かなりの不満を抱いていたことを、日記に記している。

大正8年12月13日の日記

「俺は何故名古屋にきたんだらう。恋人に別れ、家庭に別れ、ともだちに別れ、さうしてあの清らかな自然に別れて、何故俺は名古屋なんかへ来たんだらう。愚鈍なる教師と、何の思想をも持ち得ぬ無自覚な級友と、馬鹿馬鹿しいほど拙劣なる講義と放斜との写に何の興味を得られようぞ。こんな学校に入るために2年もの間尊い恋さへもすてて勉強したのかと思ふと腹が立つ。以下略」

また名古屋高等工業の一級下に、終生の友人となる松岡太郎（明治33年6月30日東京芝生まれ）がいた。卒業の後、嘉郎は大正10年に東京市電気局に就職し、松岡も翌大正11年に同じ東京市電気局に就職する。松岡は嘉郎が大正15年に東京市を離れた後もしばらく勤務を続けていたが、やはり程なくして退職する。そして建築の世界を離れて書店の経営などにあたった。晩年にはスモン病で長く闘病の生活を送るが、「吾が明治懐古」との回顧録を残しており、同書には名古屋高等工業の鈴木建築科長のお嬢さんについてこんなエピソードが記されている。

「弟が筒に巻いた免状を以てテレて居る卒業写真がある。見ると右上方に大きな円形が有ってデコデコと正装した女の子の全身が写っていた。母に「これは何処の子」と聞いた。母はくわしくは知らないらしく「なんでも鈴木とか言ふ請負師の子だそうよ」と言った。なんとこれは我々の鈴木建築科長のお嬢さんだったのである。夏目漱石の義弟で恐らく愛知県で十指の中に入るであらう高位高官の勅任教授がどうして町の請負師にまちがえられたのであろうか、私は義憤を感じずにはいられなかった。以下略。」

松岡氏の回顧録を読むと、いかにも明治・大正・昭和と生きた純朴な市井の日本人の感性といったものがうかがわれるが、それは小尾嘉郎も同じである。

図3 - 2 2 松岡太郎の回顧録（私家版）



ところで嘉郎と彼女の仲であるが、名古屋高等工業卒業前年の大正9年には結婚までも意識した関係まで進む。大正9年8月6日付けの彼女からの手紙にはこんなことが書かれている。

「おつとめの処は無論東京がよいんです。昔の思い出にも。けれど、朝鮮、満州はおろか南北のはてまでも貴君と共に居られる所が無二のパラダイスです。御身大切に。」

彼女が言う「昔の思い出」とは勿論音羽から護国寺にかけての最初のデートのことである。また実は東京市に就職が決まる前に、嘉郎に満鉄就職の誘いがあったことが手紙に書かれている。給与は内地の2倍はある。(当初一律内地の二倍の賃金が支給されていたが、後に高額すぎるということで、勤務場所により差をつけるようになった。)既に2年先輩の青山邦一が南満州鉄道で活躍していた。²⁵⁾

満鉄の初代総裁は後藤新平であるが、彼は内務省衛生局から官僚生活に入る以前は愛知県病院や陸軍名古屋鎮台病院の医師を経て愛知県病院長を勤めていた。従って名古屋との私的人脈があったことは間違いない。ちなみに、この頃後藤が寄宿していたのが後に満州建築界の大家となる横井兼介の実家であり、伯父の横井信之は愛知県病院時代の上司であった。(西澤泰彦:「海を渡った建築家」)名古屋高等工業としても、卒業生が国策会社で活躍することは望ましいことであった。

しかし彼女に話したところ、当初の反応はけんもほろろのものだった。大正期の満州はまだ海のものとも山のものともつかない異国の地であった。満州浪人などという言葉があり、本土で食いつめた者や馬賊が跋扈している土地といったイメージがあった。従って満州に行くということが一種軽蔑の眼差しで見られる風潮があった。

彼女は、「両親は絶対に満州なぞに嫁には行かせてくれないわ」と話し、嘉郎は「愛する者となら、どんな所にもいけるはずだ」と主張した。こんなやりとりで二人はぎくしゃくしていたが、その内に東京市就職の話が持ち上がってきて自然消滅した。満鉄勤務は嘉郎自身本気ではなかったろう。なぜなら嘉郎自身、両親と遠く離れて就職することは考えられないことであったからである。いわば彼女の気持ちを探るために、提案したにすぎないものであった。(小尾嘉郎書簡から)

二人は結果的に清い恋のまま終わってしまう。「きく」さんは親の決めた相手と結婚した。大正口マン華やかかりし中で、結局彼女は金襴緞子の帯を締めてひっそりと涙する花嫁となったのだろう。

そして大正9年11月8日に次のことを記して嘉郎の青春日記は終了している。

「人は決して信ずまいと思った。信じるのものは自分一人のみだと思った。しかしかく言ふ自分、かく信ずる自分が僅かの人の情にも涙ぐましいほどほだされる自分なのだ。可愛そうな自分なのだ。いぢらしい自分なのだ。さうして弱い自分なのだ。万有は一元にして金に帰す、金ほどほしいものはないと、かくまで信ずる自分は人一倍金の執着の弱い人間なんだ。なんという矛盾だらう。なんという痛ましい矛盾なんだらう。」

この嘉郎の青春日記について、ご子息の欣一教授は読んだことがなかったと言われる。

日記はB5版のノート三冊にびっしりと書き込まれている。手紙を丁寧に書き写したり、会話内容を記述している日記は異例なものだ。筆者は、文学青年であった嘉郎がいつの日か私小説として世に出そうとしていたのではないかと推測する。そして結婚後も捨てることなく保存していたのは、苦悩の日々を送った青春の記念碑と思っていたからだろう。ご子息の欣一教授はこの日記最後の一文についての感想を、遠くを見る目をされながら筆者の不躰な質問に答えて次のように語られた。

「確かに父は金儲けには余り興味を持たない、職人氣質とでもいいますが、このとおりの人でした。」

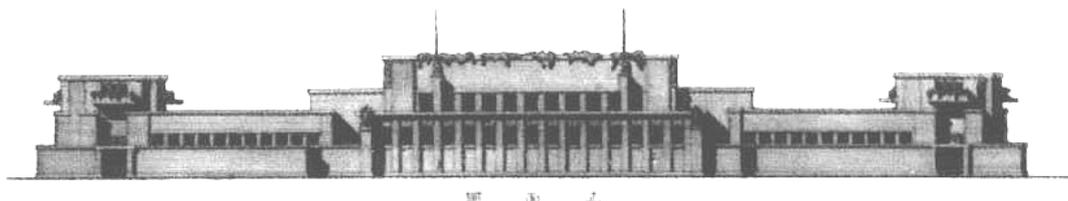
図3 - 23 小尾嘉郎名古屋高等工業学校卒業写真



出典 小尾欣一氏提供

1921年(大正10)3月、名古屋高等工業を卒業する。22歳であった。この時の卒業設計のパーズが残っている。縮刷されており不鮮明ではあるが、決して古典的なものではなく、横のラインが強調されたライトの影響を感じさせるものである。

図3 - 24 卒業制作立面図 「民衆娯楽会館」と題されている。



出典 小尾欣一氏提供

(8) 東京市電気局勤務

大正10年4月に東京市電気局に建築技手として採用された。小尾の電気局における仕事は市電施設の営繕工事である。勤務地は麹町区有楽町にある営繕係分室であった。住まいは当初勤務地近傍のアパートを借りたが、何回か転居を繰り返しており、関東大震災後、北多摩郡武蔵野村吉祥寺中道南に転居した。どうしても甲府から祖母と両親を呼び寄せなければならなかったからである。辺りは国木田独歩が愛した武蔵野の面影が残る畑と雑木林が広がっていた。国木田独歩が「武蔵野」散策をしたのは明治29年の秋から翌春にかけてであるが、その対象地は渋谷、中野、世田谷、小金井、亀戸などかなり広範囲に渡っており、今日の都市化からは想像もつかない。彼は櫛や栗などの落葉樹に心惹かれ、大都会の生活の名残と田舎の生活の余波とがここで落合って、緩かにうずを巻いているところに興味を抱いたと書いている。特に小金井の流れ(玉川上水など)周辺の春夏秋冬を賛美している。

吉祥寺にその名の寺は存在しない。本郷元町にあった寺が明暦3年の大火で門前町も含めて焼失した。寺は駒込に移り、門前町の罹災者がこの地を開墾し住み着いたことからこの地名がついた。武蔵野村は丘陵地で水田が無く、新規開墾は割に容易であり、ひいては宅地造成もやりやすい土地柄である。²⁶⁾

既に中央線は明治22年に新宿・立川間が開通している。当然SLによる運行であり、煙害を避けるためなるべく雑木林の多いコースが選定された。当初甲武鉄道(私鉄)と呼ばれ、新宿、中野、国分寺、境(後の武蔵境)、立川に駅舎が建設された。吉祥寺駅は明治32年に設置されている。明治39年に国有化され、大正に入ると電化が進んだ。吉祥寺は大正7年、国分寺は大正11年、立川は昭和4年に電化されている。

新宿まで30分、東京まで1時間で通勤可能であり、ベッドタウン適地として沿線の市街地開発が進む。さらに大正12年の関東大震災は、都心から逃げ出し杉並から吉祥寺周辺に住もうとする政治家、軍幹部や知識人の移動に拍車をかけた。例えば吉祥寺には大宅壮一、野口雨情、江口渙(プロレタリア作家、戦後日本共産党中央委員)、貴司山治(作家)らのほかに、同潤会専務理事の宮沢小五郎、朝鮮総督府総監の大野緑一郎らが転居した。

ちなみに、北多摩郡武蔵野村は明治11年に「郡区町村編成法」に基づいて村制がしかれた時は神奈川県に属していた。武蔵野四カ村(吉祥寺、関前、境、西窪)が一つになり、北多摩郡はこの時名付けられた。旧多摩郡が東西南北に四分割され、東京府に編入されていた区域を東多摩郡とし、残りの神奈川県側を西多摩、南多摩、北多摩と名付けた。いわゆる「三多摩」とはこの区分に端を発している。

三多摩が東京府に編入されたのは明治26年4月1日のことである。その理由は玉川上水に原因があった。玉川上水は江戸の初期、玉川兄弟により承応2年(1653年)から翌年にかけて、神田川だけでは不足する江戸市民の飲料と水運のために、多摩川の羽村取水口から三鷹村や吉祥寺村などを通り四谷大木戸まで開削された人工河川である。最終的には江戸城内まで引いている。この上水管理権は東京府にあった。上流区域が神奈川県に属していたため、様々な不都合が生じていた。例えば玉川上水の清潔保持の指

令や通船許可をいちいち神奈川県を通じてしなければならなかった。既に明治6年に、東京府は大蔵省に「沿岸諸村編入願」を提出しているが、政府は採択しなかった。

編入問題が再燃したのは、明治18年に横浜から発生したコレラであった。コレラの猛威は猖獗を極め、東京府内全域に蔓延した。防疫のため特に府民の飲料水である玉川上水に、三多摩住民が汚物を投棄したり農機具を上水で洗うといった慣習をやめさせなければならなかった。さらに明治25年に、上水涵養林である日原檜山の伐採許可を神奈川県が東京府に連絡なしに許可したことから、三多摩東京編入問題は一気に盛り上がったのである。

明治25年9月に東京府知事富田鉄之助は三多摩の編入願いを内務大臣・井上馨に上申した。神奈川県も東京府編入に賛成をしたのだが、元々三多摩地方は明治維新後の自由民権運動が盛んな地であり、その伝統を引き継ぎ神奈川自由党の拠点となっていたため、自由党が反対をして一大政治問題化した。しかしいわゆる不平等条約改正問題とのかけひきで自由党は軟化し、明治26年4月1日をもって三多摩は東京府に編入された。

武蔵野村が中央線沿線開発と共に人口が増加し、町制を施行したのは昭和3年1月10日である。人口3千人だった村は1万3千人になっていた。また市制を施行したのは昭和22年11月3日で、人口は6万3千人になっている。ちなみに、平成15年段階で人口は13万人を超えている。

またこの間の昭和7年10月1日に、杉並、和田堀、井荻、高井戸の四町で杉並区が新設され、東京市に編入されている。この際、隣接する武蔵野町も杉並区編入を希望したが、新区の区域は郡界に拠るとの理由で受け入れられなかった。²⁷⁾

・弟の死

嘉郎が吉祥寺に居を構える前の大正10年7月3日に三男の菊三が亡くなる。嘉郎は日記に菊三を「愛弟」と記し、ずいぶんと可愛がっていた。20歳の若さだった（青蓮院光明菊相居士）。また嘉郎自身も秋口に病に倒れ、数ヶ月の入院を余儀なくされた。病名ははっきりしないが、軽い肺結核ではなかったか。この年は人生最悪の年であったかもしれない。なぜなら、入院中にあれほど愛し合った彼女が結婚したとの連絡が入る。次の二つの和歌は、この頃に嘉郎が詠んだものである。

我病みて久しくなれば君のきて
話しゆく日の少なくなりぬ

七年の若さを嘆く恋人の
嫁ぐと聞きし秋の夜かな

嘉郎の名前が東京市電気局の職員録に見られるのは、大正11年下期版からであるが職階は7級上とある。新規採用時の職階は8級下から始まるので、大正10年には採用されていたのは間違いない。この時の市長は後藤新平（年俸2万5千円）、参与に渋沢栄

一（名誉職）及び井上敬次郎（年俸1万円）、助役は永田秀次郎（年俸1万5千円）、池田宏（年俸1万2千円）、前田多聞（年俸1万円）であった。実にそうそうたるメンバーである。ところでこの頃までの東京市政は汚職に次ぐ汚職で、腐敗の極みともいべき状態で伏魔殿とまで言われていた。大正9年の汚職の摘発で田尻市長は引責辞任し後任の市長人事は困難を極めていた。²⁸⁾

結局、時の首相・原敬の熱心な支援を得て、後藤新平が大正9年12月7日市議会で市長に指名された。第一助役の永田秀次郎は元内務相警保局長で貴族院議員となり広田内閣では拓務大臣、第二助役の池田宏は内務省社会局長、前田多聞は第二代の内務省都市計画課長で終戦直後の東久邇内閣で文部大臣になっている。いずれも後藤の側近であった。またやや遅れて市参与電気局長に台湾総督府の土木局長だった長尾半平が迎えられ、この四人と後藤の名前から世に「三田二平」の新市政と言われた。²⁹⁾

ちなみに、長尾半平は慶応元年に新潟県で生まれ、明治23年東京帝大土木科を卒業し翌年内務省に採用されている。山形県の土木課長などを歴任した後、台湾総督府において後藤新平長官のもとで力を発揮する。明治40年に実施された総督府庁舎の設計競技において事務局長兼審査員になっている。このコンペは建築物を対象とした我が国最初の本格的コンペといってよい。審査委員は辰野金吾（委員長）、伊東忠太、塚本靖、中村達太郎らであったが、辰野の強い意向で一等当選は該当なしとした。二等は長野宇平治案が当選したが、この結果に長野は強く抗議した。これ以降学会が関与するコンペでは、必ず一等を選定することとなっている。また、このコンペの一等賞金額に相当する三万円を後藤新平がポケットマネーから出していることは有名な話である。

明治41年に後藤新平が初代鉄道院総裁になり、長尾も鉄道院に呼ばれ九州鉄道管理局長など歴任し理事となる。そして大正9年に後藤が東京市長になり、電気局長としてまた呼ばれることになる。電気局は市電と電灯の企画・管理を行う部署であるが、当時日本共産党オルグの活動拠点であり、労使紛争が絶えないところであった。その意味で大変なポストであったが、後藤の懇請に「お家の一大事ならば」とすぐに引き受けたという。その後昭和5年の衆議院議員選挙に立ち当選している。

台湾総督府時代に先進土木技術を学ぶため欧州に派遣された。その間の明治33年4月からロンドンのハムステッドに滞在していた時、夏目漱石と同じ下宿に暮らしたことはよく知られている。漱石は「過去の臭い」の中で長尾について記述している。

「昼はよく近所の料理屋へ一所に出掛けた。勘定は必ずK君が払って呉れた。K君は何でも築港の調査に来てゐるとか云って、大分金を持ってゐた。家にゐると、海老茶の繻子に花鳥の刺繍のあるドレッシングガウンを着て、甚だ愉快さうであった。之に反して自分は日本を出た儘の着物が大分汚れて、見共ない始末であった。K君は余りだと云って新調の費用を貸して呉れた。

二週間の間K君と自分とは色々なことを話した。K君が、今に慶応内閣を作るんだと云ったことがある。慶応年間に生まれたもの丈で内閣を作るから慶応内閣と云うんださうである。」（岩波版夏目漱石全集第十二巻「過去の臭ひ」から抜粋）

無論K君とは長尾のことである。長尾は謹厳なクリスチャンであり、後に和光学園園長を勤め、日本国禁酒同盟理事長として禁酒運動にも取り組んでいる。内村鑑三や新渡戸稲造らと親交があり、大正6年に東京女子大学が創立されるが、その設立認可申請書を長尾とA.K.ライシャワー（明治学院大学教授、戦後駐日大使となったE.O.ライシャワーは次男）が代表となり出している。³⁰）勿論本業においても、日本の近代土木史上上の重要人物と評価されている。昭和11年6月この世を去り、多磨霊園で眠っている

図3 - 25 長尾半平 東京市電気局長時代



出典 帝都復興誌第壹巻グラビア（昭和5年、復興調査協会編）

また、後述するように、この池田宏助役こそ、大正15年に神奈川県知事となり神奈川県庁舎の竣工を祝うこととなるのだが、何か因縁めいたものが感じられる。またこの助役の人選は、後藤の依頼を受けた池田が内々に決めたものという秘話があった。

この頃の嘉郎の給与額であるが、大体月に百円弱位であった。また武蔵野村の家に、甲府から両親を呼び寄せる。当時の相場でそれほど低い給与とも思えないが嘉郎は次の歌を残している。

たまさかに友と酒汲み月給の
安きを嘆き更に飲みたり

貧しければ親と子とすむ我家に
いさかいの声常に絶えざる

厳密に言うと既述したように、小尾嘉郎日記の内文章によるものは大正9年で終わっているが、大正13年までのこれら和歌と俳句が附属している。それは資料編にまとめてある。これまた余談に属するが、大正10年に漂泊の俳人「種田山頭火」(本名種田正一)も東京市に勤務しているが、すぐにやめてしまっている。

東京市電気局の主な仕事は市電施設の営繕工事であった。無論下級官吏技師であり、名古屋で学んだアーキテクトとしての力をすぐに発揮できるものではない。ちなみに大正10年の電気局技師は総勢170人である。そして大正12年9月1日、関東大震災

があった。従って復興のための仕事が増大し、大正13年の電気局技師は実に313人を数えた。この年の12月26日次男八郎が心臓疾患で亡くなる。24歳だった。(清光院諦念道輪居士)

この間、仕事に満足出来ない嘉郎は、名古屋市の出版社「文化創設会」が住宅雑誌「栄ある生活」誌上でわずかな賞金を懸けて実施していた競技設計にこつこつと応募している。第一回で三等二席と佳作、第三回で佳作入選しているが、この「栄ある生活」という雑誌については後述する。そして明けて大正15年の早春のある日、嘉郎は神奈川県庁舎の設計競技があることを知った。

大正末年、嘉郎は吉祥寺で父・小太郎、母・とよ、及び祖母・さみと四人暮らしをしていた。生活は決して楽ではなかった。失恋、相次ぐ愛する弟達との死別、そして自分自身の大病とつらい時代であった。しかし時と共に健康も回復し、心の平安を取り戻すために、友人の松岡と房総方面を旅行したり、奈良や京都の神社仏閣を訪ねたりもしている。次の東京市電気局赤坂見附営業所は嘉郎の実社会において主体的に設計に関与した最初期の仕事と思われる。撮影は大正12年とあるが、9月の震災前であろうか。

図3 - 26 東京市電気局赤坂見附営業所写真



出典 小尾欣一氏提供

通常、建築の世界で一人前の仕事をこなせるまでの年限として、大卒3年・高卒5年が目安と言われている。大正15年には名古屋高等工業を出て5年目に入っていた。

ここで失意の嘉郎を元気付かせたのは新たな恋人の出現であった。相手は同じ電気局電話交換手(嘱託)の「畑登畿」(通称はとき)であった。ときは明治36年に三重県鈴鹿郡井田川村で出生している。従って嘉郎の5歳年下になる。幼少時から苦勞して育ったが、性格は明るく、また強い精神力を持っていた。大正期のモダンな職業婦人として、美容師をした後に東京市の電話交換の仕事についている。この頃の近代的青年男女を呼

称してモガとかモボと言う言葉が流行していた。2人の関係は順調に進み、年内には結婚することも決まった。そして大正15年3月、神奈川県が県庁舎の懸賞設計競技を公表したことを知る。

・建築雑誌「栄ある生活」

すでに嘉郎は数年前から、中京地区を主な販路としていた建築関係雑誌の「栄ある生活」(文化創設会刊行)誌が主催する住宅設計コンペに何度か応募していた。大正13年の第1回では2案提出し、三等二席と佳作に入選し、神奈川県庁舎コンペと同じ年に実施された第3回にも応募し佳作に入選している。すでにこの雑誌は廃刊されていて、公立の図書館にも保存されておらず設計の現物を発見できなかった。

名古屋市立大学芸術工学部教授の瀬口哲夫氏が雑誌「C & D」の102号で「名古屋中央建築界と米田兵三郎」と題する論文の中で「栄ある生活」を紹介している。直接筆者は瀬口教授に問い合わせたが、瀬口氏もこの雑誌の現物は見たことがないといわれた。以下瀬口氏の論文を抜粋して紹介する。

「大正末期から昭和初期にかけ、名古屋の建築界で注目されるのは、米田兵三郎の活動である。米田は、1925(大正14)年に名古屋で文化創設会を設立し、月刊雑誌「栄ある生活」の発刊を始めた。その後、文化創設会を中央建築会と改め、雑誌の名称も「建築」としている。この雑誌は1931年の中央建築会解散まで続く。中略 大正期には数多くの建築雑誌が生まれており、「栄ある生活」もこうした中の一つであるにとらえることができるが、名古屋をベースにした最初の建築雑誌であることは、特筆に値する。」

瀬口教授によれば、当時名古屋在住の著名建築家たる鈴木禎次や土屋純一、またその弟子達が米田の中京地区の建築啓蒙活動に協力したと話される。米田自身も設計事務所を経営しており、名古屋市庁舎のコンペに参加し落選している。昭和5年に「名古屋市庁舎競技設計図集」を刊行し、その中で山口文象に帝冠様式の幼稚で安価な国粹主義を疑問とする批判文を書かせ、反骨ぶりを示している。その後、建築学会中京支部が組織化されるが、独自の名古屋地区建築家組織構想を抱いていた米田は失望し、昭和6年上海に去っていった。³¹⁾

嘉郎が応募していた「栄ある生活」の誌上コンペの審査員は、以上のことから鈴木禎次らに頼んでいたことが推定される。

(8) 神奈川県庁舎設計コンペへの参加

大正15年3月5日に神奈川県庁舎建築設計圖案懸賞募集が公式に発表された。東京市の建築局や電気局の建築技師達の間で、相当話題になっただろう。審査委員長が同市建築局長の佐野利器であったが、結果的に東京市から相当数が参加していることから、佐野自身職員に積極的に応募をうながした可能性も考えられる。

さて神奈川県庁の設計競技の参加に当たって、問題は嘉郎の体調であった。同じ東京市建築局長の泰井武(名古屋高等工業の三期後輩)が応募に向けて準備をしているらしい、そのほか電気局の建築技師の何人かも応募するといったことも分かった。

こうした小尾の設計に取り組み状況は、審査結果を伝える大正15年6月22日付け、及び県庁工事落成を伝える昭和3年11月1日付け新聞各紙のインタビュー記事における小尾自身の発言により、かなりの詳細が判明している。³²⁾

小尾自身は「同じ電気局から4~5人が応募している。取組当初は非常な意気込みであったが、頭痛と腹痛に苦しみ、結局4月中旬からスケッチに着手し、5月2日から製図にとりかかった。間に合いそうもないので友人に手伝ってもらったが、最後は鉛筆痕も消しきることはできなかった。デザインについては、はじめ洋風でやったが、どうも面白くないので日本風を加味し塔、庇、玄関についてはかなりの努力を払った。」と発言している。

この発言内容を長男欣一氏の証言が補完してくれる。まず製図を手伝ったのは、先述した同じ電気局に勤務する1年後輩の松岡太郎であった。そして、特に塔のデザインで苦しむ嘉郎に決定的アドバイスしたのは父親の小太郎だということである。また立面図には消しきれなかった鉛筆痕が見て取れる。図面には暗号を付けなければならなかったが、小尾は婚約者の「登巖」から一字もらい「登」とした。

この設計競技には基本平面プランが与えられている。従って極論すれば外装と塔のデザインコンペである。懸賞金も高額で魅力だったろう。しかしその時、既に締め切りまで残すところ2ヶ月弱という4月の半ば近くになっていた。頭痛と腰痛に苦しんだと語っているが、元来腰痛は建築設計技師の持病である。

幸いなことに徐々に体調も回復し、一つの案が出来上がった。アメリカのアール・デコ調の高層ビルを5階建てにして、ライト風の装飾をメインの柱にあしらった。しかし何か物足りないとの迷いが生じた。いつかやってみたいと日頃暖めてきたイメージともなじまないデザインである。それは特に塔のデザインについてであった。しかも昼間は公務の仕事に追われて、やれるのは帰宅後の深夜と休日だけである。

父・小太郎が塔のモチーフに苦しむ嘉郎に与えた「五重塔を乗せたらどうか」との助言はまさに天啓であった。嘉郎は直接的に五重塔をビルにのせることはせず、近代様式風にデフォルメさせた。そして海上からの眺望に配慮するとの設計要領に合致させるため、観音像を塔頂部に乗せて、その基壇を兼ねた屋根は瓦を使用せず、テラコッタをマスタバ墳状に階段型にした。それが結果論的に、国会議事堂の段型屋根と似ることになるが、発案の原点はまるで違うものである。観音像は言わばニューヨークの「自由の女神」のアナロジーである。海上から眺めて、日本に到着したことのシンボルとしたかったのである。

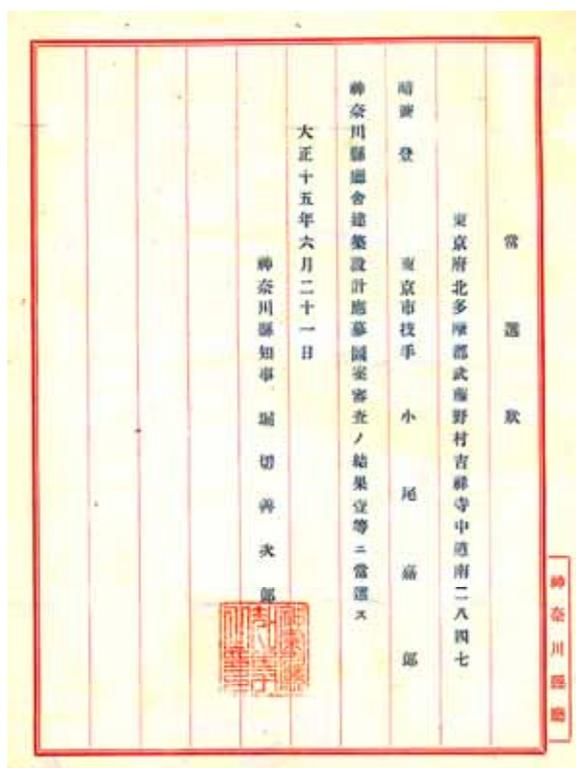
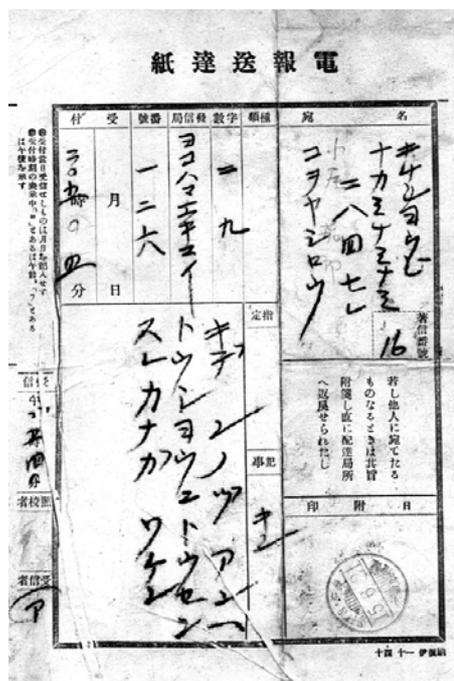
西欧の建築物で、特に教会等の最頂部に聖人やマリア像などを乗せる例はよくあるものだ。例えばモン・サン・ミシェルには大天使ミカエルが乗っているし、フィラデルフィア市役所にはウィリアム・ペンが乗っている。教会の屋根にマリア像を乗せた例は相当数に上るだろう。しかし日本ではそうした例はないし、いわんや公共建築に仏教に由来する観音像を乗せるのは、大胆といえば大胆だが、冷静に考えれば非常識ともとれる。

しかし幸か不幸か、図面上観音像の大きさは建物の大きさに比べて大変小さく、目立つものではなかった。五重塔をデフォルメした塔のデザインには相対的に影響を与えるものではなかった。大熊喜邦がコンペ審査後の評価で一部の批判さるべきところがあるとはこの観音像ではないかと思われるが、これは十分修正可能であったし、事実そうだったのである。

嘉郎には、数年前相次いで亡くなった二人の弟達への鎮魂の気持ちも込めていたかもしれない。しかしいかにも大胆な提案ではあった。

図 3 - 2 6 当選通知電報

図 3 - 2 7 正式当選通知状



出典 3 - 2 6 , 2 7 共に神奈川県立公文書館所蔵

予定期限よりも10日も早い大正15年6月21日の午後二時、神奈川県は岡野町の仮庁舎の会議室において、小尾嘉郎の県庁舎懸賞設計競技一等当選を記者発表した。

22日の新聞各紙を総合すると、次の事実が分かる。6月21日のその日、嘉郎は電気局工務課営繕係分室で通常勤務をしていた。午後3時頃になりこのニュースは局内を

(9) 小尾嘉郎の神奈川県への採用

既に神奈川県は、一等当選者を県職員として招聘するというを、6月の当選案発表の直後に公表しており、当然嘉郎もその話は知っていたろう。実戦のチーフとして腕をふるうチャンスではあるが、そう楽な話しではなかった。問題は通勤だったろう。吉祥寺から桜木町までは2時間くらいかかっただろう。県庁舎建築事務所は大正15年の7月には現場の敷地内にバラック建てで完成しており、岡野町の仮庁舎から移っていた。³⁴⁾

大正15年10月9日、嘉郎は建築技手として神奈川県に採用される。勿論配属は県庁舎建築事務所である。また月給は140円であった。しかしこの転職は結果から言えば失敗であった。この時、コンペの終了から4ヶ月経過しており、実戦部隊は嘉郎の案を基にして昼夜兼行で実施設計図面を佐野利器の指導下で検討を重ねていた。中央の塔屋は短く詰められ、頂部の観音像は簡易な銅製の相輪状のものに置き換えられていた。外壁模様もあっさりしたものとなっていた。要は嘉郎でなければ描けない図面などなかったのである。

嘉郎自身、すぐさまこの転職が失敗と思ったようである。嘉郎は辞表を提出し、翌昭和2年1月15日付けで嘉郎はその職を解かれた。今日残る実施設計図では、塔屋階の平面図の一枚だけ(図2-48)に「小尾」のサインが読みとれる。³⁵⁾

小尾自筆の履歴書によると、神奈川県を退職した27年1月にはすぐに松坂屋臨時建築部に採用され、恩師である鈴木禎次設計の松坂屋上野店新築工事の設計監理をしていることから、小尾はかなり早期の段階で神奈川県就職は失敗と考え、再就職の準備をしていたと想像できる。松坂屋には名古屋高等工業1期後輩の伊藤鑛一が竹中工務店を経て、大正13年から働いていた。³⁶⁾伊藤鑛一は主に構造を、嘉郎は計画を担当したのであろう。なお伊藤鑛一は、戦後日本最大級の設計事務所たる日建設の社長となる。

しかしこうした小尾の早期退職は神奈川県サイドからも東京市建築局長だった佐野利器にとっても、はなはだ面白くない出来事であったろう。事実小尾は県庁舎の落成・開庁式に招待されていない。³⁷⁾役所の性格として、こうした思いがけない職員の退職を伝統的に嫌う傾向があることを筆者は体験的に知っている。勿論、佐野利器にとっても快いものではなかったろう。例え東京帝大出身者でも、佐野の逆鱗にふれた者は日の目を見なかったことが村松貞次郎の「日本建築家山脈」に記述されている。³⁸⁾

またこれ以降の戦前期においては、公共建築におけるコンペの一等当選者を実施設計に招聘するというのもなくなっているが、小尾のケースが悪しき前例になった可能性は否定できない。

嘉郎の自筆履歴書には、神奈川県に奉職したことは記述されていない。嘉郎が大正15年から昭和2年まで神奈川県に務めていたことから、一見すると2年位神奈川県職員であったかのように勘違いしてしまう。実はかつて筆者もその一人であった。しかし昭和元年とは、大正天皇が大正15年12月25日に崩御しているので、実質6日間しかない。だから2年どころか、3カ月の勤務でしかなかったのである。

(1 0) 独立後の小尾嘉郎

昭和2年早々に神奈川県を退職した後、嘉郎は松坂屋建築部技師となり松坂屋上野営業所新築工事の設計監理をしている。松坂屋は恩師・鈴木禎次の強いコネのある会社である。入社はいきさつははっきりしないが、多分神奈川県庁に就職した直後にはすでに水面下で話しは進められていたのだろう。松坂屋上野営業所は昭和4年12月に完成する。この間の昭和3年2月に長女「ふき」が誕生した。上野営業所の完成をもって、嘉郎は松坂屋を退職し、明けて昭和5年1月に個人建築設計事務所を吉祥寺の自宅内に開設した。「小尾建築工房」と名付けた。特に所員を採用しておらず、まさに個人事務所そのものであるが、これは戦後に開設した「小尾建築工務所」においても同じである。しかし開業したものの建築工房の経営は厳しいものとなった。

すでに昭和2年には渡辺銀行や台湾銀行の破綻などの金融恐慌が始まっており、追い打ちをかけるように昭和4年10月にはウォール街の株式市場の大暴落から世界大恐慌が始まった。浜口雄幸内閣は昭和5年の1月に金輸出の解禁を行ったが、デフレ不況は深刻化の一途をたどっていた。こんな経済下の昭和4年10月から翌5年の1月にかけて名古屋市役所の設計競技が開催された。また昭和5年5月から7月にかけて大礼記念京都美術館のコンペが行われた。これらに嘉郎は参加していない。

自己の事務所を開設したばかりで、ゆとりもなかった。しかし小住宅以外これといった仕事の引き合いがない。そして9月に入り、軍人会館が競技設計に付されると発表があった。嘉郎は名古屋市役所コンペの応募作品を見ると自分のアイデアがまさに百花繚乱のように使われていたのを知っていた。そして当選案もそんなものの一つである。和洋折衷に自分なりの考えを持つ者たる自負心もさることながら、何よりも賞金が魅力である。それが軍人会館コンペに参加することを決意させた。

・ 軍人会館建築設計図案懸賞募集

昭和5年9月に、帝国在郷軍人会の主催による軍人会館(現在の九段会館)の懸賞設計競技の実施が発表された。小尾嘉郎が世に再びその名前を出したのが軍人会館の設計競技であり、また最後でもあった。

軍人会館の設計要件の主なものをあげると次のとおりである。

「設計心得」(抄)

- 一、建築敷地ハ東京市麹町区飯田町一丁目(俗称牛ヶ淵)ニシテ別紙敷地測量図ニ示セル区域 内トス
- 二、敷地面積八一七七六坪トス
- 三、会館延面積ハ約四〇〇〇坪トシ面積ハ壁眞ヲ以テ計算スルコト
- 四、会館ハ本館及別館ニ区分シ両館ハ連接構築スルモ外見上別館ナルコトヲ一目瞭然タラシムルコト
- 六、建築ノ様式ハ随意ナルモ容姿ハ国粹ノ気品ヲ備ヘ荘厳雄大ノ特色ヲ表現スルコト
- 八、総建築費ハ約百四十五万円トス

十、添付平面図八各室ノ配列關係及大サヲ参考トシテ示シタルモノナルニ依リ応募者ハ
必 スシモ之レニ拘束サルヽ要ナク間取ノ計画ニツキ十分研究ヲ望ム

賞金と審査員（抄）

設計図案は、昭和5年12月15日正午に締切り、6年1月中旬入選発表する

賞金 一等賞（1名）金5千円
二等賞（2名）各金2千5百円
参等賞（3名）各金千円
佳作（4名）各金5百円

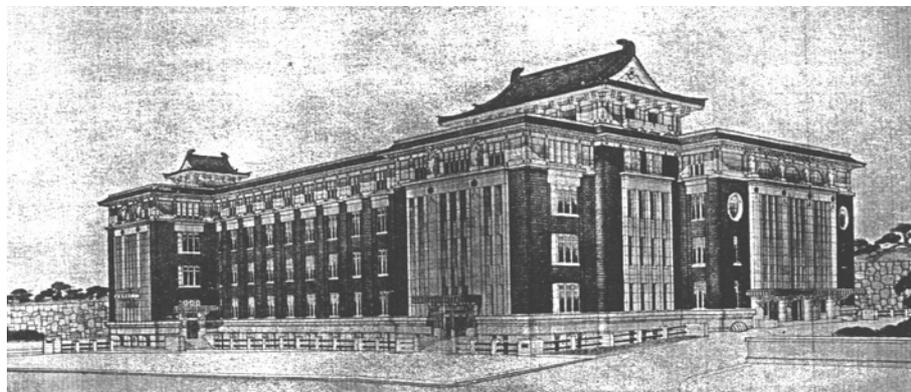
審査員	工学博士	伊東忠太
	帝国在郷軍人会理事	稲垣三郎
	同 審議員	飯田久恒
	工学博士	大熊喜邦
	工学博士	塚本 靖
	帝国在郷軍人会財団理事長	辻村楠造
	工学士	内藤太郎
	工学博士	中村達太郎
	工学博士	内田祥三
	工学博士	佐藤功一
	帝国軍人会評議員	関仲次郎

募集案内の時点で、結果発表は年を越えた昭和6年1月中旬となっていたが、実際は昭和5年の12月23日に審査は終了し、その日の内に当選者に内報がなされた。応募総数は323件にのぼっていたが、伊東忠太以下建築関係の審査員はいわば常連であり、審査方法にかなり手慣れてきていたに違いない。正式には12月26日に審査結果が公表された。

一等の小野武雄案から佳作に入った小尾嘉郎案など入選案10件はすべて洋風ビルに城郭建築を最上部に乗せたものとなっている。この結果設計心得にある「国粋の気品」なるものが入母屋造の城郭建築によって表現されることがオーソライズされた。

実施設計は小野案を基に川元良一が行い、清水組の施工で昭和9年に完成している。昭和11年の2・26事件の際には戒厳司令部がおかれたりしたが、元来は予備役や後備役軍人の宿泊・訓練の場であった。ちなみに満州国皇帝愛親覚羅溥儀の弟溥傑氏と浩（嵯峨侯爵令嬢）さんの結婚式もここで行われている。戦後は進駐軍によって接收されたが、返還の後今は九段会館と名前を変えて、一般に公開使用され、屋上にはピヤガーデンもできた。

図3 - 28 軍人会館懸賞設計小野武雄一等当選案



出典 軍人会館競技設計図集（洪洋社、昭和6年4月）以下図3 - 37まで同じ

図3 - 29 軍人会館懸賞設計 小尾嘉郎佳作入選案



図3 - 30 二席 吉永京蔵・黒川仁三案



图 3 - 3 1 二等二席 木村平五郎案



图 3 - 3 2 三等一席 大手市太郎・島崎豊壽案

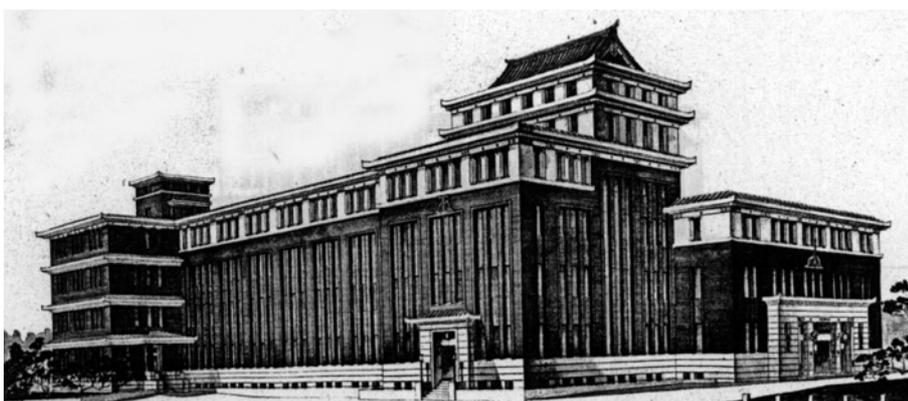


图 3 - 3 3 三等二席 小林武夫・掘武雄案

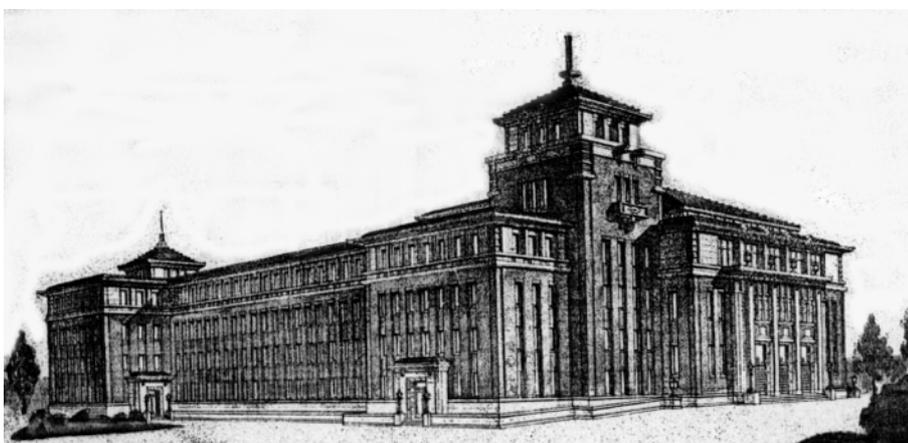


図3-34 三等三席 前田健二郎案



図3-35 佳作 渡邊 仁案



図3-36 佳作 堀越三郎案



図3-37 軍人会館建築設計図案懸賞当選者公式発表文書

軍人会館建築設計図案懸賞當選者發表

昭和五年十二月十六日 帝國在郷軍人会本部

豫て本會ニ於テ募集セル軍人会館建築設計圖案ハ締切期限迄ニ
 参百貳拾參通ノ応募アリ審査ノ結果當選者左表ノ通り決定ス

審査員 (ノロハ)

工學博士 伊東忠太郎
 帝國在郷軍人会理事 飯田恒三郎
 同 齋藤興 大熊喜邦
 工學博士 塚本喜造
 工學博士 中村達太郎
 工學博士 内藤太三郎
 工學博士 佐藤功一
 工學博士 關仲次郎

帝國在郷軍人会評議員
 帝國在郷軍人会評議員

等	席	賞金	階級	受附員	住所	氏名
一	等	五千圓	○	二〇六	東京市牛草町上井一四五六	小野武雄
二	等	貳千五百圓	●	一六三	東京市牛草町上馬一〇一四	青永仁三
二	等	貳千五百圓	●	二二八	東京市牛草町上馬一〇一四	黒川仁三
三	等	壹千圓	◎	一八五	東京市牛草町上馬一〇一四	木村平五郎
三	等	壹千圓	◎	二二八	東京市牛草町上馬一〇一四	大久保三巳
三	等	壹千圓	◎	二二八	東京市牛草町上馬一〇一四	高橋武夫
三	等	壹千圓	◎	二二八	東京市牛草町上馬一〇一四	小林武雄
三	等	壹千圓	◎	二二八	東京市牛草町上馬一〇一四	堀越三郎
佳	作	五百圓	◎	二五七	東京市牛草町上馬一〇一四	渡邊仁
佳	作	五百圓	◎	一六二	東京市牛草町上馬一〇一四	黒川仁三
佳	作	五百圓	◎	二九二	東京市牛草町上馬一〇一四	天久保春忠
佳	作	五百圓	◎	一七七	東京市牛草町上馬一〇一四	堀越三郎

嘉郎は佳作入選に当たって「軍人会館彙報」³⁹⁾の中で、次のようなコメントを残している。

「感想

所感として、特に申上るほどの事も御座いませんが、常時私の周囲其の他につき少しく書いてみませう。

世界的不況とやらは、私の如き一技術者の身边にまで襲い来たりて、依頼されて設計をなすと雖も、設計料の入る事希に、職を得て月給にありつかんとすれども、求むる人無く実に苦境の際本懸賞募集の発表を見、応じて末席を汚し入選いたしました。其の賞大ならずと雖も、干天に慈雨を得たるが如しとでも申しませうか。

建物の使用目的、敷地の環境等よりして様式は日本建築を基調とせるものとなさんとしこれを古城郭より暗示を得て考案を練りました。処が後に聞けば応募図案の内、城郭に暗示を得たものが非常に多かつたさうで、成程誰しも考へさうな事で、一般を行ったばかりの事でした。

日本建築を基調としても不消化のまゝ之を取り入れたる例へば歌舞伎座の如き、建築材料の如何を考慮せずして、徒に型態を真写せるものが今後発達しようとは思はれません。即ち伝統の精神を取りて之を現代建築構造に合致せしめたるもの(棒線筆者)こそ将来我が建築界を支配するものではないかと思はれます。私は従来この点につき研究して参りましたが、今回の応募図案に於ても未だ満足なる成果を得ず誠に御辱しい次第ですが、今後とも大に此の点に努力致すつもりで居ります。」

「軍人会館彙報」のコメント前段は、正直に経済的苦境を吐露したものであり、後段は彼の和洋折衷スタイルに関する哲学である。少なくとも神奈川県庁舎の時は、和風を露骨に洋風に合体させることはなかったが、この軍人会館では城郭スタイルをそのままのせている。これは神奈川県庁舎後の名古屋市庁舎や大礼記念京都美術館の設計競技で、具体的な和風の屋根がかけられた案が当選する傾向を意識し、また「設計心得」の様式規定にある「容姿八国粹ノ気品ヲ備ヘ莊嚴雄大ノ特色ヲ表現スルコト」との要求に応えようとした結果であろう。

それでも歌舞伎座を建築材料と合致しない建築と批判している。歌舞伎座は大正13年12月に、岡田信一郎と内藤多仲のコンビによる設計で完成している。地上4階地下1階で鉄骨鉄筋コンクリート造のものである。今日残っている歌舞伎座は、昭和26年に吉田五十八の設計により戦災修復したものである。この建物に洋風スタイルはほとんど無く、日本式のにぎやかなスタイルを鉄骨鉄筋コンクリートで仕上げたこと自体大変な苦勞があったに違いない。しかしこの時期モダニズムを唱導するサイド(例えば雑誌「国際建築、昭和6年2~3月号」誌上での牧野正巳の「国粹主義か国辱的建築か」など、日本的建築が鉄筋コンクリートでは不経済でなじまないとの論調)からの強い日本趣味建築批判が現れていた。

小尾嘉郎のこのコメントは、「和」と「洋」をいかにアウフヘーベンするかを自らの建築デザインの主要テーマとしている証として、この歌舞伎座批判をしたものであろう。だが、小尾の建築家人生でそれを立証するような建築デザインは出来なかったし、その機会にも恵まれることはなかった。

図3-38 軍人会館設計競技佳作三等当選内報、ガリ版刷りで随分と質素な通知である。

應募圖案入選ニ関スル件内報

昭和五年十二月二十三日 帝國在郷軍人会本部

小尾嘉郎 殿

般本會ニ於テ懸賞ヲ以テ募集致候軍人会館建築
 設計圖案ハ本日審査ヲ終了致シ候處貴下ノ應募圖
 案ハ佳作第一等ノ席ヲ以テ入選致シ候條及内報候也
 追テ規定第十條ニ依リ入選者ノ發表ハ後日ト相成
 可ク候ニ付申添候

佐藤

出典 小尾欣一氏提供（神奈川県立公文書館所蔵）

・井荻浄水場

昭和6年3月に次女ふきが生まれる。そしてどのような事情があったかは分からないが、嘉郎と登畿の婚姻届もようやくこの月に正式に武蔵野町役場に出されている。昭和6年9月18日には関東軍が満州事変を起こしている。軍部ファッショがいよいよ吹き荒れ、日本壊滅への道と繋がる日中15年戦争開始の年でもあった。

軍人会館のコンペ終了後の仕事として唯一はっきりしているのは嘉郎の住む吉祥寺の隣町に当たる井荻町（現在の杉並区井荻）町営水道浄水場の上屋工事である。この話はかつて勤めた東京市時代の上司であり水道技師である仲田聰治郎からと思われる。

明治以来の井荻は、まさに閑静な武蔵野の林と田園風景の続くのどかな土地柄であっ

たが、西武鉄道の発達や町の中央を青梅街道が縦断しているという交通の利便性により大正末から昭和にかけて急激に住宅地開発が進んだ。この井荻地区はちょうど西武新宿線と青梅街道にはさまれており、整然とした町並みを形成しているが、これは大正15年から昭和10年までに実施された区画整理事業の結果であり、その功労者が明治40年(1907年)から21年間村長及び町長を務めた内田秀五郎であった。

越沢明氏によれば、内田は後に都議会議長、東京都農業会長、全国農業委員会協議会長を歴任する郊外農業を代表する政治家であったという。そして井荻を抜ける二つの幹線道路の青梅街道と環状八号線はこの区画整理によって整備された。⁴⁰⁾

図3 - 40 内田秀五郎



図3 - 41 仲田聰治郎



出典3 - 40、3 - 41共に「第一期水道抄誌」(井荻町、昭和7年刊)

そこで急激に伸びた水需要対策を講じる必要が生じていた。町は水道敷設委員会を設置し、町長井口泰吉は委員長に内田秀五郎に就任要請した。また東京市技師の仲田聰治郎に委嘱して、善福寺池脇の地下水の水源調査を行い、浄水源として適切との結果を得ることができた。

昭和5年10月に国の水道敷設認可と起債が認められ、昭和6年1月に町は水道部を組織し、第1工区(水源、浄水場)の嘱託職員として嘉郎を採用した。嘉郎は浄水場の上屋を設計した。実際の建築完成ははっきりしないが、昭和6年から7年にかけてと推定される。

味もそっけもない水道機械の上屋ではあるが、円形にした付属屋や欄間部分に小窓を連続させているところに嘉郎の工夫が見られる。鉄筋コンクリート平屋で、装飾のないモダニズム建築である。この井戸水は上水として今日も使用されている。現在は東京都水道局の管理下にあり、テロ対策のために厳重に鉄柵で囲われている。

図3 - 4 2 現在の井荻浄水場上屋 木造の下屋は戦後建てられたもの



図3 - 4 3 当時の工事写真、3 - 4 2の写真と反対側から撮影したもの



出典 第一期水道抄誌（井荻町）

・小尾家墓地

嘉郎は昭和7年に東京市営の多磨墓地（現在の都営多磨霊園）の一角を買い求めた。正門からほど近い場所である。嘉郎は墓石のデザインを自ら行った。今もその図面が残されている。平成11年11月に筆者が初めてこの墓碑を見た時、ある種のショックを受けたことを思い出す。それはひと目で神奈川県庁舎の塔を模していると感じたからである。

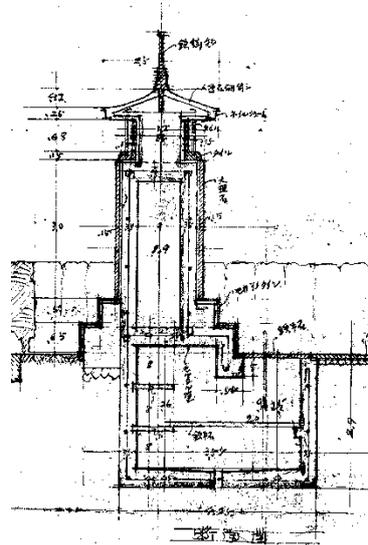
墓碑の上部に神奈川県庁舎に使われたものと同系色のタイルが貼られている。最頂部には相輪に当たる金属部分があったことが図3 - 4 5 から分かるが、戦時下の金属供出で今は無い。それが3 - 4 4である。嘉郎は気になっていた夭折した2人の弟の骨を納骨した。池田宏の墓地も歩いて1分と離れていない近傍にある。さらには偶然であるが

コルビジェの日本人三大弟子の1人「吉坂隆正」氏の墓も近接して存在している。

図3 - 4 4 小尾家墓碑



図3 - 4 5 嘉郎自身の設計断面図



出典 神奈川県立公文書館蔵

図3 - 4 6 池田宏の墓



図3 - 4 7 池田宏の顕彰碑



顕彰碑文は以下のとおりで、簡潔に池田の事績が記述されている。⁴¹⁾場所は池田家墓地のやや多磨霊園正門側近傍にあり、周囲は樹木が茂っている。

池田宏君碑

從三位勲二等池田宏君八静岡県士族池田忠一ノ長男ニシテ明治十四年ヲ以テ生レ京都帝国大学法律学科ヲ卒業シ内務省ニ入り欧米視察ノ後内務省工営課長都市計画課長社会局長ニ歴任シ都市計画ノコト未ダ世ニ唱ヘラレサル時ニ於テ君ハ広ク海外ノ事例ト我国ノ實際トニ照シ具ニ研鑽考研シテ都市計画法及市街地建築物法ノ立案実

施ニ当ル今日本邦都市之力恩沢ニ浴セサルハナカラシ

大正九年後藤新平伯ノ東京市長トナルヤ招カレテ助役トナリ東京市政ノ刷新ト其ノ進路ニ一生面ヲ拓キ大正十二年関東大震災ノ際社会局長官ニ起用セラレ帝都復興院計画局長ヲ兼ネ亞テ京都府神奈川知事ニ歴任シテ令名アリ都市計画ノ普及ヲ図リ自治政ノ発達ヲ期スルハ実ニ君カ天職ヲ以テ自カラ任シタル所ニシテ或ハ都市研究会東京市政調査会同潤会都市計画協議会全国都市問題会議等ノ創設運行ニカメ或ハ大阪商科大学京都帝国大学新設ノ市政講座ヲ担任シ其ノ我邦都市問題ノ科学的研究ニ胎シタル業績ハ帝都復興計画上海ノ大都市計画等實際ニ対スル貢獻ト共ニ蓋シ不朽ナラン今ヤ国家総力ヲ拏ゲテ興亞大業ノ達成ニ邁進スヘキ非常時局ニ際シ昭和十四年一月七日遽カニ易簣セラル痛惜曷ソ堪ヘン有志胥謀リテ茲ニ碑ヲ建テ事績ノ梗概ヲ録シテ之ヲ後ニ伝フ

昭和十五年一月七日

法学博士 男爵 一木喜徳郎

識

いずれにせよ、嘉郎は有能な設計技師ではあっても、よきオルガナイザーたりえなかったのかもしれない。結局生涯を通じて、所員を採用して大きな仕事を受託するというやり方は採らなかった。また時代も悪かった。昭和に入って金融恐慌がおこり、さらに昭和4年（1929年）10月にはウォール街に始まる世界大恐慌の時代に突入した。

・バーナード・ショウの来日⁴²⁾

バーナード・ショウについては前章でもふれたが、もう少し詳しく記述する。昭和8年3月6日早朝、横浜港大棧橋に豪華客船エムプレス・オブ・ブリテン号（42,500トン）が横付けされた。前年のクリスマスをパレスチナで過ごし、インドを經由し神戸を経て横浜に来航したものだ。当時の新聞はその豪華さを浮宮殿と形容している。地元は観光収入を当て込み、弁天通りには歓迎の装飾が飾り立てられた。しかし折からの世界的金融恐慌により、乗船客は300人程度で船室の半分は空室だった。4日間停泊したが地元が期待したほどの経済効果は得られなかった。

この船自体の豪華さは日本人の耳目を集めたのだが、それ以上に関心を呼んだのは船客の中に文豪バーナード・ショウがいたことであつた。マイフェアレディの原作「ピグマリオン」の作者であり世界的劇作家であることは夙に知られているが、駄洒落や歯に衣着せぬ皮肉が得意のしゃれたイギリス親爺であつた。日本では別府、神戸、京都、大阪、奈良と巡った。いづこも記者に囲まれ大騒ぎとなつたが、6日の横浜では取り巻いた記者連中に対して次のようなきつい発言をしている。

「私はショウだが、ショウ（見せ物）ではないぜ。」

「日本は絵の国だなんて誰が言ったのか。ラファカディオ・ハーンは嘘を言っている。こんな汚い国はない。貧民窟ばかりで見られたもんじゃない。そして田舎がなくみんなな都会ばかりじゃないか。日本人は95%新聞記者かい。ゆっくり散歩もできないじゃ

ないか。」

あけて7日は春めいた晴天となり、ショウのご機嫌はすこぶるよかった。午前九時半に船から降りて、関西から駆けつけた吉田長祥画伯と2人で散歩にでた。日本人記者が後を追う。大棧橋を出てすぐに英国領事館前を抜け、それから左折して日本大通りに入った。

昭和3年に完成してからまだ間もない神奈川県庁舎が眼前に広がる。街路樹として植栽された銀杏はまだ幼木で、目を遮るものはなかった。ショウは歩みを止めて、じっと見つめる。早速記者が印象を聞いた。

「うん、なかなかいいじゃないか。第一プロポーションがいい。プロポーションがよいということは、立派に美を形成することであって、これが良い例じゃないかね。」

この後、紅葉坂を上がり掃部山公園まで散策し、愛用のライカカメラのシャッターをさかんにきった。午になりタクシーで船に戻った。バーナード・ショウは滞日中皮肉や憎まれ口を叩いていたが、数少ないほめたものの1つに神奈川県庁舎があったとして評判になった。

昭和11年には静岡県信用組合連合会（静岡市御幸町、現在の静岡県信用農業組合連合会の前身）の設計に参加している。金庫の詳細図だけが残っている。

またこの頃に大島観光ホテルの設計にも関与しているが、いずれもその関与の度合いなど具体的なことは、はっきりしない。いずれの施設も現存しておらず、記録も残っていない。

図3 - 48 静岡県信用組合連合会（現存せず）



図3 - 49 大島観光ホテル（現存せず）



出典 3 - 48、49 共に小尾欣一氏提供

昭和12年10月に長男欣一が誕生する。そして昭和14年5月には父・小太郎が70歳で死去し、多磨霊園に埋葬した。厳しかった父も、吉祥寺の広い敷地で植物の世話など穏やかな晩年を送り波乱の生涯を終えた。(真證院喜法還浄居士)

しかし嘉郎にとって仕事はえり好みなどしていただける状況ではなかった。友人・知人、知り合いの大工などからの紹介で、住宅、商店の増改築のどんな小規模な仕事でも、丁寧にこなしていった。

昭和16年12月8日、日本はハワイ真珠湾攻撃を行い、太平洋戦争が始まった。そしてこうした小規模な仕事すら無くなっていった。そんな状況下で幸運にも住宅営団に昭和17年8月から採用された。そして東京支所工務第三課長のポストが与えられた。住宅営団分課規程を見ると、東京支所の工務第三課は昭和17年5月29日に設置とあり、嘉郎が着任するまで課長ポストは2ヶ月間空席になっており、あたかも嘉郎のために用意されたように見える。⁴³⁾この就職には営団理事の宮沢小五郎の介在が想定できる。小尾嘉郎の家と宮沢小五郎の家は、吉祥寺で井の頭通りを挟んで100メートルほどしか離れていない。今でこそ宅地が分割され、住宅が密集しているが、戦前は1宅地が400坪前後あり、ほとんど隣家に近いものだった。

・住宅営団

住宅営団は、昭和16年3月6日に公布された「住宅営団法」(4月7日施行)に基づき設置された特殊法人であり(1億円を政府が全額出資)、廃止された同潤会の仕事を引き継ぐと共に、戦時下の逼迫する軍需労務者用住宅の確保などを目的とする住宅供給の国家代行機関であった。すでに4月には準備作業が本格化していたが、公式の稼働は同年5月1日で、後にこの日は営団創立記念日として職員の休日になっている。

住宅営団には東京市役所の勤務経験者が何人かいた。大物としては、理事の福田重義があげられる。福田は横浜市開港記念会館の設計コンペ一等当選者として名前が知られている。明治20年2月に東京渋谷に生まれ、同41年に東京帝大建築学科を卒業し大阪住友総本店臨時建築部に採用された。続いて同43年9月に東京市技師となり、営繕課、電気局工務課などに勤務している。その意味で嘉郎の先輩である。後に東京市復興事業局長として関東大震災復興事業に尽力し、同潤会評議員・建築部長、住宅営団理事・建設局長を歴任している。戦後は東急建設取締役、東急電鉄顧問となっている。

また営団の研究部調査課長や営繕課長であった石原憲治も東京市技師の時代があった。石原は大正8年に東京帝大建築学科を卒業し、大阪市に勤務の後東京市にきている。昭和19年5月に営団を退職し、陸軍軍政地教授としてバンドン工業大学土木建築科主任教授となっている。戦後は鹿島建設の顧問、東京都立大学建築工学科教授、日本都市計画学会会長などを務めた。

こうした技術職だけではなく、事務方にも東京市OBが多くいた。営団の経営局長と東京支所長を勤めた宮沢小五郎は、嘉郎が東京市に勤務し2年目の大正11年では東京市経理課長である。採用の権限を有する宮沢が直接か間接かは別にしても、嘉郎を営団に引き上げたことは間違いなく、公私にわたり相談に行っていたようだ。事実嘉郎は息子・欣一の手を引いて近所を散歩した折り、「ここが宮沢さんの家だよ」と語ったことや

何かと宮沢家に足を運んでいたことを、欣一氏は記憶している。

・宮沢小五郎

図3 - 50 昭和23年頃の宮沢小五郎



出典 津田つる子（宮沢の姻族）氏提供

宮沢小五郎は明治15年11月8日に仙台で生まれている。宮沢家は仙台伊達藩に仕える士族であった。小五郎は15代宮沢家当主に当たる。明治34年に宮城県第二中学校（現在の宮城県立仙台第二高等学校で、小五郎は第1回生）を卒業し、東京に出て東京市に採用された。ノンキャリアではあったが、東北なまりを話し数字に強くかつ誠実な人柄から、周囲の人間から信頼を受け、同じ東北水沢市出身の後藤新平市長の信任を受け、さらにその部下・池田宏の懐刀のような存在になる。

大正8年に高等官（正七位勲六等）の仲間入りをし、秋田県内務部庶務課長（兼市町村吏員懲戒審査会員）として派遣され、大正10年に後藤新平が東京市長となるや、呼び戻されて、東京市道路主事（課長待遇）、翌11年には同市経理課長に就任している。

そして財団法人同潤会が、大正13年5月に発足してから昭和16年4月の解散に至るまでの18年間、一貫して小五郎は専務理事職であり、同潤会と苦楽を共にした裏の裏まですべて知り尽くしている唯一の人物である。しかし宮沢小五郎自身を調べた研究書はほとんど見当たらない。

・同潤会の名前の云われ

財団法人・同潤会設立の原資は関東大震災の義捐金で、国内から3,740万円、国外から2,160万円、計5,900万円が寄せられていたが、その内の1千万円が水野錬太郎内務大臣から交付されたものであった。池田宏はその初代理事長となり、佐野利器が評議員、内田祥三が理事兼建築部長になる。場所は当初社会局の一部屋を使用したため、社会局同潤会と呼ばれたりした。なお同潤会の名称は同潤会十八年史によれば「淋同江海之潤」から採ったとしている。⁴⁴⁾後藤新平か池田宏、あるいは宮沢自身が命名したものが、はっきりとしたことは記録されていない。しかし後述するが、宮沢の戒名には同潤の文字が含まれていることなどから、宮沢自身の発案の可能性が高いと考えられる。文教大学講師の佐々木良氏にこの六文字の意味するところをご教示いただいた。

この六文字の出典は「晋書・応詹伝」であり、「水が浸透する様は（天皇陛下の恩愛が日本国民へ浸透することは）大河や海が自然や人間にもたらす恩恵と同じで、じわじわと伝播し拡がっていく」とのことであった。従って同潤会とは国民が等しく天皇の恵沢をお受けする会ということになるだろう。

同潤会は当時とすれば斬新な企画のアパート建設で人口に膾炙しているが、猿江裏町、横浜南太田町、日暮里等のスラムクリアランス、中堅勤労者向けの住宅分譲、軍人遺族家族向けのアパート、福祉事業として託児所、診療所、また住宅相談や福祉的融資のソフト事業などきわめて多岐に及んでいる。小五郎は部下に命じてヨーロッパの最新共同住宅事情を調査させるなど、研究活動も積極的にやらせた。また小五郎は住宅建設反対者がいた場合は、自ら率先して説得にあたるなどした。

青山アパートの建設に当たっての秘話が残されている。⁴⁵⁾同潤会が青山穩田一丁目のアパート建設計画を発表するや、長岡外史が猛反対したのである。長岡は当時衆議院議員であるが、元々山口県下松市出身の陸軍軍人（安政5年生）であった。日露戦争では児玉源太郎の直属の部下として参謀次長を務め、明治43年に第十三師団長、大正2年に第十六師団長を歴任し、大正6年に予備役に編入された。第十三師団長の時、オーストリア軍人のレルヒが来日して軍人にスキーを指導することとなった。長岡はスキーの楽しさを知り、民間にも普及させることを命じた。現在新潟県上越市に、日本スキー導入の恩人として長岡の胸像とともに日本スキー発祥記念館が建っている。また日本航空事業育成者としても知られるが、何よりもその長いカイゼル髭が有名で、予備役後も長岡將軍と呼ばれ、穩田一帯の町内会長でもあった。その將軍が二頭立ての馬車に乗って、同潤会本部に乗り込んできた。

建設反対の理由は、青山の敷地は表参道に沿った陛下の御道筋にあたり、陛下を見下ろす不敬の行為がなされる恐れがあること、またこの辺りは風致地区で松林を伐採したり、洗濯物を窓に干されたりすると風致景観が破壊されるというものであった。職員は將軍が反対していることは知っていたが、まさか馬車で本人がくるとは夢想だにできなかった。

対応は宮沢小五郎がした。松林の伐採は最小限に止め、そして行幸の際は道側の窓は全部閉じさせる、洗濯物はすべて屋上で干させ、さらに周囲に壁を高くして外部から見えないようにすると誠意を込めて説得し、最後はどうかこの宮沢小五郎を信じて欲しいと言った。すると將軍は「君を信じよう」と言ってすぐに立ち去ったという。しかし小五郎は青山アパートの管理について特別厳しく指導した。一階の住人も屋上まで布団を干しに上がった。將軍との約束は少なくとも戦前までは完全に守られたという。

小五郎にとって一番の苦労は家賃徴収にあった。昭和初期の深刻な不景気は、当然に家賃納入不能者を生み出し、家賃値下げ運動の頻発さらには社会主義の影響を受けた入居者は家賃不納同盟などを組織した。小五郎はこれら事態に根気よく誠実に対応していった。

ちなみに同潤会の会長は歴代の内務大臣（昭和13年以降は厚生大臣）が、副会長は事務次官が努めた。池田宏は財団発足時に理事長となっているが、この職は昭和3年3月に廃止されている。しかし実質専務理事が現場の最高指揮官である。

小五郎は昭和8年の武蔵野町議会議員選挙に立候補し、当選を果たす。この一つ前の

昭和4年の町議会選挙が普選の第1回で、それまでは24人の町議員はすべて土地の相当な地主ばかりであったが、この選挙で無産党の江口渙をはじめ地域外からの移住者が数名当選し、町議会に移転住民議員と地元出身議員との間で何かと軋轢が生じていた。特に議長については、慣例で町長がなっていたが、小五郎は議員になるやいさなり議長に選ばれている。左右両派から信望があったのは小五郎だけであった。⁴⁶⁾

一方同潤会はその使命を終えて解散することになるが、仕事はそのまま住宅営団に引き継がれた。小五郎は営団設立に当たっての十九人からなる「住宅営団設立委員会」のメンバーでもあった。ただしノンキャリアであるため末席である。しかし実際に住宅営団が設立されるに当たっては、小五郎の強い熱意によるものだった。

「証言・日本の住宅政策」(大本圭野編、日本評論社、1991年6月)の中で、加藤陽三(明治43年広島県生まれ、昭和9年東京帝大法科卒、厚生省社会局生活課、同住宅課、防衛庁事務次官、昭和44年から51年まで衆議院議員)が昭和15年の地代家賃統制令の改正に当たって宮沢小五郎の意見を聞き、また営団設立について次のように語っている。なお大本圭野氏は東京経済大学教授である。

大本 同潤会から住宅営団になりますが、同潤会の発展的解消と考えてよいでしょうか。
加藤 見てもいいです。同潤会の専務理事をやられた宮沢小五郎氏が非常に熱心に働きかけてきました。われわれは経験をもっているんだから、政府自体もこういう特殊法人をつかって大規模に住宅をやられてはどうかと提言してきて、なるほどこれも必要だと思った。

県や市町村に公営住宅をやらせていますけれども、国自身もやろうじゃないかということになったと思います。住宅営団の債券も発行できるようにして、もっと大規模にやらせようとしたんです。

大本 宮沢さんの影響は大きいわけですね。

加藤 いまの住宅公団の母体になる営団をつくるについては、あの人の影響力は大きかったと思います。

住宅営団設立委員会の委員長は厚生省次官の児玉九一で、建築界からは内田祥三、佐野利器が参画している。住宅営団が発足すると、小五郎は理事兼経営局長、その後東京支所長となる。

営団解散後は、営団技術者OBを集めて昭和22年3月に大和建设株式会社を設立し、同社の社長となった。副社長には服部八十利が、経理部長には永田一郎が就任したが共に営団の出身であった。特に服部は同潤会以来の部下だった。また営団研究部規格課技師から警視庁建築監督官を経て大和建设に合流した前田勤などがいたことがわかっている。社業は小五郎の経営手腕と服部らの技術力、そしてなにより日本復興の時期と重なり好調で、共同住宅を得意とする全国規模の中堅ゼネコンとなっていく。

昭和30年8月22日に「営団を偲び公団に望む」と題する座談会が開催され、雑誌「住宅」(昭和30年9月号)にその様子が載っている。勿論、小五郎の肩書きは大和建设社長となっている。司会を大村巳代治が務め、小五郎以下同潤会から住宅営団の両方

に勤めた者が五人、そのほか市浦健や公団から二名の計十人が集まっている。この中で、小五郎の発言部分を抜き書きしてみる。

司会 営団は同潤会が母体になって設立されたが生みの親である宮沢さんに当時の状況を。

宮沢 当時私は同潤会の専務理事をやって住宅問題に約十八年関係してきたので営団法の立案当時から相談にのり同潤会を発展的に解消して営団を作ったので出足は非常に良かった。本部の機構は総務、建設、経営の三局と研究部で後で資材が昇格して局になりました。理事が局部長を兼務してました。地方の支所は仙台、名古屋、大阪、広島、福岡、東京の六カ所で開始し、後に横浜と高松を追加しました。

司会 営団の建設計画は初年度三万戸五カ年三十万戸だったが、公団のは初年度二万戸しか決っていませんね。

宮沢 初年度三万戸は同潤会の引継の建設を加えて辻褃を合せましたが、十六年度から二十年迄の五カ年間は戦争の熾烈化に伴って資材や輸送が窮屈になり段々に規模を小さくして戸数を増すのに努力したのですが結局半分の十五万戸位建てた。

司会 営団誕生の母体となった同潤会は戦前のアパート建設の草分けでした。当時の専務理事をされていた宮沢さんの思い出話を願いますか。

宮沢 同潤会は大正十三年六月にできたのでしょうか。その時に木造住宅を八千戸、アパートを二千戸こしらえる計画で二千戸建てるのに三年かかった。庶民アパートは初めての試みですから、どういう型式にするか問題が多くて随分手間取った。それでまず一番最初青山の表参道のアパート、次は渋谷の代官山、深川の清砂町、これらは二部屋です。一番おしまいの江戸川アパートは借金をして建てたのですが、これらは日本の将来の庶民住宅が二部屋では困るといっているので、四部屋が七戸、二部屋が十戸、あとは平均三部屋です。一室平均家賃が十円、三室のやつが三十五、六円です。当時庶民住宅が三十五、六円とは怪しからんといわれた。それから労働者向のアパートの委託を受けて建てているうちに支那事変になったのです。

司会 不良住宅改良のが猿江町等にありましたね。

宮沢 あれは東京都がやったんだ。私のやったのは住吉町です。横浜の南太田、この方は設計も変えて細民向に小室にしたのです。それから三河島アパートは四畳半に六畳の二間です。

司会 虎ノ門のアパートは

宮沢 あれは事務所の上を利用したので、いつでも事務室に改造できるように独身アパートにした。

司会 大塚の女子アパートは

宮沢 女子アパートはね、これはやはり低利資金でやったが、女というのはむづかしいですよ。これは失敗だった。採算がとれない。もっとも始めから採算がとれなくともよいとの考えだからいいのだが、何せね顔を洗うのに十銭いれればお湯が出るのを、朝顔を洗う分だけはただで供給したら、そればかり沢山使う。また出かけてゆく時に屋上のただの水の出るところの桶に洗濯物を入れたまま出てゆく。なにしろただのものはいくらでも粗末に使う。自分の払うガスは月の勘定が六銭とか五銭と

かいうのがありましたよ。

司会 あの頃お茶の水駅の対岸の文化アパートが低利資金でできましたね。

宮沢 あれはその前にできていた高級住宅で廊下でつないでいる。あの当時で百円とか百五十円しました。

司会 九段の野々宮は江戸川頃ですか。

宮沢 あれは自分の金でやった高級アパートですね。金はいくらでも出して、そのかわり経営上もちゃんと成り立つようになっていた。

司会 戦争前はこんなものですかね。

市浦 銀座六丁目のアパート

宮沢 それは同潤会のアパートの経営がいいというのでみんなが真似をして出したのさ。

浅羽 あの頃鉄筋はいくら位でできたのでしょうか。

宮沢 江戸川は一坪二百円ですよ。学校建築が一坪百五十円でした。

市浦 暖房がありましたね。

宮沢 暖房も入れて貸したんだ。それから水も自家水道を作ってやった。そうして結局一坪二百四、五十円だった。日暮里、青山など戦災で焼かれました。不燃のアパートなのにね。

市浦 宮益坂アパートを見学して、江戸川アパートを知っているのであまり違うのでびっくりしました。

司会 どう違うのですか。

市浦 江戸川の方が立派ですよ。宮益坂はなんだか・・・、

吉沢 江戸川はこの間十何年ぶりにいってみました、唐紙が開設当初のままです。あれは芭蕉布を使いましてね。

島 同潤会は監督が喧しいので有名だった。宮沢さんのおしこみで（笑声）

吉沢 唐紙の問題ですね、宮沢さんが御発案の模様なしの無地を使ったんです。無味乾燥ですが、営繕の立場では非常に助かる。

浅羽 同潤会はサッシュを使ったわけですね。

宮沢 木造ですよ。虎ノ門と江戸川だけです。サッシュを使ったのは。

司会 しかし通風のための小窓なんか虎ノ門あたりからやってらっしゃったですね。

宮沢 あれはどこでもやっていますよ。

中島 宮沢さんは、むつかしい現場をことに熱を入れられて、労務者から現場掛り全部集めて詳細に一人一人に当ってそれでは資材は全部やっておいたぞ、資金をそこに廻せと指導指揮をやられたわけです。それだけの熱意がないと遂行できないと思います。

佐分利 私は宮沢さんの御薫陶を受けておりましたが、その中でえらい教訓の一つは今でも思い出しますが、敷地が獲得されたならば、建設の半ばはなったんだ、ということですよ。

この対談から宮沢の仕事に対する熱意がどれほどのもので、また部下からもいかに信頼されていたかが読みとれる。なお司会の 大村巳代治は元建設省住宅局長、市浦は市浦健（住宅営団研究部長、対談時は建築事務所自営、後に建築家協会会長）、吉沢は吉沢孝

治（同潤会管理課庶務係長、住宅営団住宅課長、対談時は東京都住宅協会管理部長）、島は島守一（同潤会産住担当技師、住宅営団横浜支所課長、対談時は住宅公団分譲住宅課長）、浅羽は浅羽三郎（住宅公団建築部長）、中島は中島博（住宅営団疎開部技師、対談時は参議院建設委員会調査員）のことである。

また前掲書の「証言・日本の住宅政策」の中で、市浦健は宮沢小五郎のひとりとなりを次のように語っている。

市浦 同潤会のいちばんの実力者は宮沢小五郎さんでしたね。あの人は悪い言葉でいうと成り上がりで、中学校ぐらいしか出ていない、あるいはもっと低かったかもしれませんが、東京市に勤めていた。中略 宮沢さんは秋田から出てきて東京市に入って、実力者になって、同潤会はこの人が動かしたんです。⁴⁷⁾

大本 宮沢小五郎さんは東京市ではなにをやられていたのでしょうか。

市浦 公設市場などをやっていたということを知っています。公設市場はいまはないけれど、昔はほうぼうにあったんでしょう。ことに不景気するとき、公設市場をつくって日常の消費物資、おもに食料品が安く買えるようにということだったと思います。四谷には建物が残っていました。

大本 大正期には経済的扶助という形で公設市場とか小住宅援助とかいろいろやっていたようですね。

市浦 福祉行政の一環でしょう。彼は苦学力行の人で努力家でもあり、頭のいい、非常に積極的な人でした。だから住宅営団ができてからも、やっぱり実力者でした。

昭和33年5月6日、小五郎は脳溢血で死去した。享年77歳。その戒名は「同潤院壽翁昌禅居士」である。仙台市青葉区北山の資福禅寺で愛妻越路とともに眠っている。

その後大和建設は昭和37年には東京証券取引所2部上場を果たし、マンション建設を得意とする中堅企業として発展したが、残念にも折からの不動産不況のあおりを受けて平成15年5月に民事再生法の適用申請をし、今日解散している。

小五郎の長男・正雄は東大建築を卒業した後防衛施設庁に勤務しており、定年退職後大和建設常務取締役や監査役などをしたが昭和61年に死去している。大和建設は宮沢家の同族会社ではなく、正雄氏死亡の時点で両者の縁は切れている。吉祥寺の小五郎宅の敷地は四百坪ほどあり、後年息子の正雄氏が敷地の一部に賃貸マンションを建設したが、その名前を「潤」と名付けている。また西隣には警視總監や朝鮮総督府總監を務めた大野緑一郎の屋敷があり、武蔵野市の登録文化財になっている。

住宅営団時代に宮沢小五郎の部下としてその警咳に接した畔柳安雄氏（元神奈川県住宅公社理事、同保全協会理事長、経歴は資料編に記載）は、「住宅屋三十年」（私家版）の中で、そのひとりとなりを次のように記している。

発足当時（同潤会のこと、筆者注）から解散まで、終始同会の専務理事としてワンマン的存在であった宮沢小五郎氏は住宅営団発足と同時に、営団の理事に就任、経営局長として私は殆ど毎日のようにその警咳に接していた。同氏は禿頭、慈眼、一見まことに好々爺でしかなかったが、囲碁は三段、弓道は練士、書をよくし、また宝生流

の大家でもあって、水道橋の能舞台に立たれることも屢々というまことに多趣味の人であったが、こと住宅問題となると一步も自説を譲らなかった。

「住宅の問題は長期の見通しに立たなければ駄目だ。君達だって自分の家をつくるとなれば、20年、30年先のことを考えるに違いない。それは住宅は子孫に遺すべき財産だからだ。公共の住宅だって同じことで、目先のこと許り考えてやれば必ず失敗する。殊にコンクリートアパートの場合だったら、まず50年先のことを考えるんだね。」とか、

「公共住宅の場合には、どう管理するか、そのことを先に建てなくては駄目だよ。」とか私も何度か聞かされたことばである。

筆者は小五郎の孫に当たる日出雄氏（正雄の長男）からも、同様の思い出話を聞いている。小五郎は庭に弓の練習場を作っており、謡曲（実際は観世流だった）は妻の越路が鼓を打つ夫唱婦隨の趣味で、長男・正雄も謡曲の師範格となり、自衛隊関係者に多くの弟子がいたようだ。宮沢小五郎は今日的言い方をすれば、ノンキャリアの星であったろうが、そんな表現が不適切であると思えるほど、日本の住宅政策史に残した足跡は大きい。

さて、同潤会が主に関東大震災後の罹災者生活安定に向けた住宅供給を目指したのに対して、住宅営団は軍事下の経済と連動する総合的住宅政策の重要な担い手となっていた。後の住宅公団の雛形であったと言っていいだろう。区画整理手法を駆使した面整備を行い、建築単体としても、住宅の標準規格やパネル式組立住宅の研究開発がなされた。プレハブ建築の魁だが、この研究は研究部規格課で行われ、ここに責任者として市浦健（戦後建築家協会会長）、部下に西山卯三（戦後京大教授）、森田茂介らがいた。西山は営団内部に直接工事を執行する「建設総隊」構想を打ち出したが、取り上げられず、これが元で昭和19年4月に営団を退職し、京都大学に戻っている。（後年西山はこの構想が間違いだったと反省している。）

嘉郎が営団に採用された具体的要因の一つに、北多摩郡三鷹町に中島飛行機研究所（現在は国際基督教大学の敷地に取り込まれている）があり、その従業員と関連する企業従業員のための住宅建設が急務であったことにあった。三鷹は嘉郎が住む吉祥寺の隣町であるが、北多摩郡全域に渡って、住宅営団は中島飛行機関連工場従業員（徴用工）のための住宅団地を相当数建設している。営団は徴用工の住宅を軍の指示により全国に建設している。畔柳安雄氏の「住宅屋三十年」によれば、軍は軒の出は1尺2寸にしるなどと、何かと干渉してきた。逆に用地買収は簡単で、必要な農地を市町村役場と協議して決めてしまえば、地主には「お国のため」と半ば強制的に買収に応じさせた。説明会には憲兵が同席していて、少しでも不服がましい発言者がいれば軍刀を立てて「非国民」呼ばわりをした。

こうした徴用工の住宅は一戸が六坪二合五勺の長屋で、玄関兼台所の土間に六畳と三畳の部屋があった。屋根は紙のルーフィング、畳は無く、荒ムシロの上に薄ベリというバラック住宅であり、いわゆる「ハモニカ長屋」と呼ばれ、全国に数万戸建設された。⁴

⁸）従って同潤会住宅と言えれば時代の先端を行くパイオニア建築としてのイメージを得た

が、営団は初期の総合的住宅政策推進母体としての目的からはずれ、軍部介入以降のバラック住宅供給組織としてのマイナスイメージが定着することとなってしまった。

・中島飛行機

中島飛行機は、海軍の軍人であった中島知久平が郷里の群馬県太田市に工場を開設したことに始まる。大正6年のことである。中島は明治17年に群馬県尾島町で生まれ、明治40年海軍機関学校を卒業し、海軍に入り機関大尉にまで進んでいた。大正7年のシベリア出兵で飛行機の需要が高まり、昭和6年9月の満州事変からさらに急増した。軍は中島に生産の拡大を要求したため、中島は昭和12年に武蔵野町西窪に五万五千坪の敷地に武蔵野製作所を開設し、13年には田無に発動機の鋳造工場を設置した。三鷹には研究所をつくった。武蔵野製作所で仕上げた発動機は太田工場に送られ、飛行機に取り付けられた。

昭和14年にノモンハン事件が起き、日本軍はソ連軍に壊滅的敗北を喫するが、戦闘機「中島」の優秀性はこの時認知された。昭和16年12月8日に太平洋戦争が勃発するが、中島飛行機株式会社の役割はますます重要となり、工場労働者と家族住宅、宿舎の建設が進んだ。

五日市街道が商店街化し、吉祥寺駅周辺の商業は軍需景気で沸き立った。武蔵野町の昭和12年の人口は二万九千人であったが、昭和16年には5万人を超えた。また昭和5年に、計測器メーカーの横河電気製作所が武蔵野町に渋谷から移転を開始していたが、当然計測器も航空機用の需要が増大し、戦時下の武蔵野町は「中島」と「横河」の工場を中心とする軍需産業都市の体をなしていたのである。中島飛行機(株)が終戦まで製造した飛行機は30,515機に上っている。

中島は工場経営の一方政界に進む。昭和5年の衆議院選挙で初当選し、昭和12年の近衛内閣では鉄道大臣、14年には第八代政友会総裁となっている。昭和24年10月に死去(享年六十六歳)するが、昭和59年に尾島町の名誉町民第一号になっている。戦後は製造対象が飛行機からスクーターそして自動車へと変わり、社名は富士重工業となる。

戦争が進むとこれら工場は当然米軍の空襲の標的となった。最初は昭和17年4月18日、銚子沖の空母から飛び立った爆撃機が東京に爆弾を落とした。2年後の昭和19年11月10日にB29は超高度から偵察飛行を行い、同月24日七十機の編隊が中島飛行機工場に爆弾を投下した。すでに米軍はサイパン島を落とし、ここにB29の日本爆撃用基地が完成して、十分日本との往復が可能となっていた。この第一回の工場爆撃だけで死者五十七人、負傷者七十五人の被害を受けた。

その後昭和20年8月8日までに武蔵野製作所だけで8回、都合9回空襲を受け、死傷者合計486人(内死者220人)を出すなど、その物的被害は甚大であった。しかし武蔵野町への空襲は工場を対象とするピンポイント爆撃で、いわゆる無差別爆撃ではなかった。勿論誤爆による住宅の被爆もあるにはあったが、焼夷弾の雨が降るといったことはなく、都心に比べれば家屋被害は極めて少ないものだった。⁴⁹⁾

幸い嘉郎の家も被害を受けることはなかった。欣一氏の話では、自宅から、中島飛行

機や横河電気の工場が空爆を受けている様子はよく見えたとのことである。横河が爆撃を受けた時は、破片が庭にまで飛び込んできたと言う。だが東京大空襲のような市街地への無差別で執拗な空爆がなかったことは、戦後吉祥寺をはじめ、武蔵野町がいち早く復興する要因となっている。

しかし嘉郎は安全のため家族を甲府の親類に疎開させることを考えており、実際に荷物を送り込んでいた。ところが昭和20年7月6日、甲府市自身が大空襲を受け灰燼に帰っていた。送り込んだ荷物もすべて焼失していた。そうこうしている内に終戦を迎えたのである。

(10) 敗戦そして住宅営団の解散

昭和20年8月15日、太平洋戦争が天皇の詔勅により終わりを告げた。この時嘉郎は47歳になっていた。翌年の昭和21年12月23日に、住宅営団は突然GHQにより戦争協力団体であったとの理由で解散を命じられた。ただちに閉鎖機関保管人委員会によって営団は閉鎖処分されたが、実際にはその時点でも建設中の建物があり、経過措置として工事は完了させて整理することとなった。

住宅営団の閉鎖は、ある種昭和史の謎とも言われてきた。たしかに植民地朝鮮にも、朝鮮住宅営団を作り、軍政下の手先になっていたのも確かである。中島飛行機のような軍需生産部門を住宅の面で下支えしているのも確かであった。そのほかに営団の労働組合に、日本共産党のオルグが入るなどして強力だったことも閉鎖の一因だったとの有力説もある。GHQは経済の民主化と復興が進む中で、特定産業に関しては閉鎖の解除をしているが(例えば船舶公団、石炭公団、繊維公団、肥料公団などの設立)、灰燼に帰した国土における住宅建設は焦眉の課題であったにもかかわらず、住宅営団は閉鎖解除の認可団体とはならなかった。

住宅営団法の廃止は昭和24年の11月までずれこんでいる。設立から閉鎖の時までに、住宅営団は225,505戸(新築165,087戸、移築・補修15,859戸、部材加工39,663戸)と4,896戸の同潤会からの引継住宅があった。閉鎖時点で賃貸住宅は63,627戸あったが、内45,099戸は個人、公共団体、居住者団体に売却し、工事中の2,678戸も完成させた後同様に売却している。昭和24年の営団法廃止時点での未処分住宅は18,145戸であったが、昭和27年3月に閉鎖機関整理委員会が解散する時点で5,639戸が残った。⁵⁰⁾これらは建財株式会社を設立して、その処分を任せることとした。

この急激な財産管理の移転、なかんずく都道府県への公有地管理の移転は今日に至るまでも問題を引きずっている。民有地内に整理されていない国有財産の存在などがその典型である。

いずれにせよ住宅営団が手がけた膨大な土地と建物のかなりの部分を、所在する各都道府県が引き継ぐこととなった。このため職を失った若手の住宅営団技術者は、都道府県などの地方公共団体に採用される者が多かった。閉鎖時点で約5千人の営団職員がいたようだが、その半数以上は地元の都道府県・市町村に雇用された。この雇用のために、戦災復興院の幹部は都道府県回りをして副知事レベルまで直接再就職の依頼に動いた。ま

た当時GHQの指令で、臨時建築制限令によって建築監視官制度ができることとなり、これに対応する建築行政技術者の需要が行政側に生じていたことも再就職に幸いした。筆者は昭和43年に神奈川県庁に採用されたが、この当時先輩職員の内数人が営団出身者であったことを記憶している。

(11) 住宅営団閉鎖後

嘉郎は年齢的に、地方官庁に再就職することは困難だった。営団閉鎖後、すぐに東京復興産業株式会社に、建築部長として採用された。長男欽一はまだ9歳の育ち盛りであった。嘉郎自筆の経歴書では、営団の閉鎖を昭和21年5月と記述しており、会社就職を同年6月としている。公式の閉鎖命令より半年前にその情報があつたことになるが、多分嘉郎の記憶違いであろう。

この東京復興産業株式会社についてはよく分からない。営団OBが集まり立ち上げた会社かもしれない。唯一、昭和23年度の会計検査院の決算検査報告に2点ほど指摘事項の中に名前が挙げられている。第一は復興金融公庫の融資について回収未済ありと指摘がされている。指摘された会社は東京復興産業ほか8社で、その中には間組や大和建設も含まれている。第二は工事費の積算に当たり不当な計算をしたとして、三沢地区維持管理工事が摘発されている。これは単に資材を納入するだけのものに、工事と同じ諸経費率を使用したものであった。この指摘は東京復興産業の件ほか7件あり、鹿島建設も含まれている。この三沢の件は仙台特別調達局の発注に係るものであり、かなり手広く業務をしていたことが推察される。⁵¹⁾

・小尾建築工務所の開設

昭和24年7月、嘉郎は東京復興産業を退職して、同年8月から再び設計事務所を開設した。この会計検査院の指摘と嘉郎の退職に関係があつたかどうかは分からない。新たに開設した設計事務所を小尾建築工務所と名付けた。やはり人を雇用することなく、一人でやることとしている。単に設計だけでなく、簡単な工事も請け負ったようである。この頃には大工をはじめ、各種職人のネットワークができていた。

やはり仕事の主力は住宅と商店である。廃墟となった都市の復興期であるから、仕事は潤沢にあつた。手に負えない場合は協力事務所と連携して対応した。昭和25年5月24日、市街地建築物法が廃止され、新たに建築基準法と建築士法が公布された。戦後日本の建築に関する基本制度が整備された。特に建築士法は、一級建築士と二級建築士に分けられ、所在する都道府県に対して建築士事務所登録をしなければ業務ができないこととされた。

嘉郎は昭和26年9月21日に野田卯一建設大臣名で一級建築士の資格を得ている。番号は第9423号であった。この、いわば第一期の一級建築士の資格は経歴で取得できた。昭和25年11月7日付け建設省告示第1162号は、選考基準を示しており、大卒は8年、旧専門学校令による専門学校卒は12年、旧中学校令による中等学校卒は20年以上の実務（最低6件の建築工事監理で、設計は2倍にカウントできた）経験が

必要だった。なお俗説に一級建築士第一号は田中角栄だったというものがあるが、やはり俗説に過ぎず、第一号は山形県の渋江菊蔵氏である。⁵²⁾面白いことに、小尾嘉郎の一級建築士免許証は二つある。紛失を理由に昭和39年に再発行してもらっている。

昭和32年には小尾建設株式会社を形式的に立ち上げた。大工や鳶その他職種の連携によって、小住宅や木賃アパートの設計施工を行えるようにした。とって実体は個人事務所が変化したものではない。看板が変わっただけだった。

昭和35年まで事務所経営するが、この間に権藤設計事務所（権藤要吉、一級建築士番号96号、戦前宮内省に勤務し、アール・デコ様式で著名な旧朝香宮邸の実設計者）と協力し、住宅、店舗、ホテル、旅館の小規模なものの設計をしている。やはり人を採用して事務所を組織化することは考えなかった。欣一氏の証言によれば、妻の「とき」は折りにふれて、もっと儲かる大きな仕事をしたらどうかと嘉郎の尻を叩いたが、意に介さなかったという。子供達に対しても勉強しろとか口やかましいことは一切言わなかった。長男の欣一がかつて自分が目指していた東京工業大学に合格した時はさすがに喜んでいる。

そして今日でも残る図面からは、どんなつまらない建て売り住宅であっても、丹念な仕事をしていたことがわかる。

嘉郎にはこれといった趣味はなかった。プロ野球などのスポーツにも関心を示さなかった。ただ新聞の和歌や俳句の欄には、必ず目を通していた。気に入ったものはスクラップをしたりしている。若かりし嘉郎が、文学青年であり、多くの和歌・俳句を詠んでいたことは、家族の誰も知らないことだった。寡黙な嘉郎は自らの過去を語ることはなかった。

・恩賜林記念館

小尾嘉郎の最後の公共建築となったこの建物は、山梨県庁から向かって行くと舞鶴公園の入り口部分に建っている。昭和28年4月に完成した建築である。

山梨県の産業近代化が生糸生産に負うところが大きいことはこの章の冒頭で述べた。それが裏腹に山林の荒廃を呼び、明治40年と43年の大水害の一因ともなったのである。また山林荒廃の要因のもう一つに、明治14年の旧小物成地の大部分が官有地に編入されたことがある。小物成地とは近世から続く、入会権が認められていた天領のことである。当時の藤村県令は国においても入会権は存続されるものと考えていたが、農商務省はこれを禁止する措置をとった。怒った農民は、乱伐・盗伐を繰り返し、山林の荒廃は進んだ。

「恩賜県有財産誕生のあらまし」(山梨県、刊行年記載なし)によれば、明治40年・43年の大水害から水害対策としての治山対策が叫ばれ、県民大会が開催されて御料林の還付が決議され、翌年県議会も同趣旨の意見書を提出した。そこで明治44年3月11日、区内大臣渡邊千秋は桂太郎総理に御沙汰書を出し、298,203町7反7畝15歩の御料林を山梨県に下げ渡すこととした。この下賜された御料林は以後恩賜県有財産と呼ばれ、各地に作られた恩賜林保護組合が保護管理することとなった。

舞鶴城公園の中央に恩賜林御下賜を記念したオベリスク状の塔が立っている。これは

伊東忠太と弟子の大江新太郎の設計により、大正6年12月から3カ年、10万円を費やして建造されたものである。今日甲府市のシンボルともなっているものだ。

恩賜林記念館は、恩賜林保護団体が御下賜40周年を記念して、昭和26年に企画されたものである。なぜこの設計が嘉郎のところに持ち込まれたかのいきさつは判然としないが、団体の有力者に嘉郎の知り合いがいたのであろう。

木造2階建て、延べ810平方メートルの規模である。工事費は約1千万円で、県の補助金、林業団体の助成と寄付、そして保護団体の拠出金でまかなわれた。屋根は緑色の瓦を使い、外壁は人造花崗岩ブロック張りとなっており、一見木造には見えない。

木材や石材はすべて恩賜林内から産出したものを使用している。施工は和風建築を得意とする水沢工務店山梨営業所が行った。それにしても嘉郎にとって、この仕事は思い入れ深いものであったに違いない。夭折した二人の弟とよく遊びにきた公園内であり、かつては建築家を目指す動機付けの一つでもあった機山館があった。トレーシングペーパーにぎっしり書き込まれた嘉郎直筆の仕様書にもそれが感じられる。近年老朽化が進み、平成10年から2年に渡って大改装をしているが、基本的に初期の姿に復元したもので、内部会議室の折り上げ格天井などは見事なものである。

図3 - 5 1 恩賜林記念館、右手奥に謝恩記念塔が見える



昭和36年1月に和田順顕建築事務所に採用され、大生相互銀行秩父支店の工事監理を担当した。この時62歳になっていた。和田順顕は明治22年4月に石川県金沢市で生まれているので、嘉郎より9歳年上になる。明治45年に東京美術学校を卒業しているので岡田信一郎の愛弟子に当たる。大正4年に建築事務所を開設し各地の風月堂のビルを設計している。我々になじみ深いのは、神奈川県庁からほど近い昭和10年に完成した日本郵船横浜支店の古典様式である。和田は昭和52年12月に大磯の自邸で亡くなった。

昭和36年7月に大生相互銀行の落成と共に、和田事務所を辞め、8月から古賀一郎

建築事務所に移り、東京都箱根保養所の「開雲荘」の改築工事と駒沢大学学寮新築工事の工事監理を昭和38年1月まで行っている。

その後また小尾建築工務所で小住宅の増改築などを行い、昭和40年5月に、下元連建築事務所東京支店山団地の住宅建設工事の工事監理を昭和41年3月まで行った。下元連については既述のとおりである。

この間の昭和40年3月に母親の「とよ」が老衰で亡くなっている。(眞行院釈尼豊悟照大姉)

昭和41年で68歳になっていた。すでに二人の娘は結婚し孫にも恵まれていた。長男の欣一は母校の東京工大で理学博士の学位をとり物理学の教鞭をとっていた。そしてこの年の秋に欣一も結婚した。晩年にあたるこの段階では、たまに知り合いから頼まれる住宅の改造の相談にのり、大工を紹介したりする程度になった。

(13) 小尾嘉郎の最期

そして昭和46年に体調の不良を覚えた。脳梗塞が始まっていた。そして昭和47年12月8日、吉祥寺の自宅で家族に看取られながら静かにこの世を去った。享年76歳だった。(浄心院岸嘉祥居士)

また苦楽を共にした妻の「とき」は、平成2年2月2日に老衰で亡くなっている。享年88歳。(松寿院法雪貞嘉大姉)夭折した二人の弟や両親共々、多磨霊園の嘉郎自身が設計した神奈川県庁舎塔を模した墓碑の下で眠っている。

嘉郎の後半の人生については、幸い親族の方が健在であり、その生活ぶりや言動を記述することができた。しかし小尾嘉郎という一代三世(明治、大正、昭和と生き抜いた)の人間像をすべて理解しえたなぞとはまことにおこがましい。青春時代の饒舌までの日記に残された心情とは裏腹に、戦中・戦後明治の男はあまりに寡黙である。そして戦前のコンペで活躍したことを売りにして設計事務所経営をすることは、嘉郎も同窓の泰井武もしなかった。神奈川県庁舎コンペに協力してくれた親友の松岡太郎もとうに建築の世界を離れ、書店経営などをして闘病の末その人生を終えた。

戦争後は強制移入された民主主義と建築ではモダニズムが席卷し、180度の価値観が転換する中で再度建築家として世に出ようとする意欲を失っていた。自分をはじめた和洋折衷スタイルの建築が満州にまで展開し、国粹主義建築として批判されおり、その批判が的はずれなものであることも分かってはいても、反論する場も意欲もなかったのだろう。激動の世紀を生き抜いた男は最後まで寡黙を貫ぬいた。

それでも気の強い妻・ときは、「もっと他人に頭を下げて営業に励んだら」とせつついたようだが、嘉郎にその気はまったくなかった。青春日記の最後に書かれた「金ほどほしいものはないと、かくまで信ずる自分は人一倍金の執着の弱い人間なんだ」が文字通り貫徹された。

嘉郎の最終局面での仕事は、そのほとんどが今日で言う代願屋(小規模住宅等の建築確認申請手続きを施主に代わって行い報酬を得る業務)的工作であった。今日残された図面から、その仕事(作品と言えるものではない)のリストを資料編に記載している。しかしどんな仕事でも、図面をひいている時はいかにも楽しそうだったと長男・欽一氏

は語る。気が乗れば徹夜を厭うことなく図面書きに没頭した。(ただし翌日の昼間は寝ていた。)そのことは残されたトレーシングペーパーが物語っている。そして仕事が一段落すれば、好きな日本酒を静かにそしてうまそうに飲むのが日課だった。

第2節 その他の入選者達

ここでは小尾嘉郎以外の当選者の顔ぶれの内何人かを追ってみる。

(1) 相賀兼介

この県庁舎設計競技で惜しくも二等一席に甘んじた相賀兼介は、満州において活躍した建築家を語る際の忘れてはならない一人である。明治21年に生まれているので、この大正15年では37歳の働き盛りであった。相賀については「満州都市物語・河出書房新社、西澤泰彦著」に詳しい。

相賀は明治40年に満鉄に事務職として入社する。満鉄は前年の明治39年に南満州鉄道株式会社として設立され本社は東京におかれた。日露戦争後のポーツマス講和会議で、日本はロシアが清国から得ていた旅順・大連のある遼東半島の租借権と長春、旅順間の鉄道、また付随する撫順や煙台の炭坑採掘権などを手に入れる。満鉄の定款には鉄道、炭坑の経営、水運業、電気業など多様な業務が定められている。資本金は2億円で、政府が一億を現物出資し、残りを株式の募集によって調達された。この株式募集は当時大変な人気を呼びブームとなった。

台湾総督府の民政長官をしていた後藤新平が、その手腕を買われ初代総裁となる。その時49歳だった。後藤の口癖は「一に人、二に人、三に人」であった。総裁に就任すると、官民間問わず人材を集める。その翌年本社は東京から大連に移る。

その年に応募し、入社した一人が相賀だった。配属されたのは本社建築係である。そこで建築設計に興味を抱き、明治44年に東京高等工業学校建築科の選科生となり、建築を学ぶ。大正2年に卒業して満鉄に戻るが、本社建築課先輩の横井謙介が独立して横井建築事務所を開設すると誘われて同事務所の所員となる。大正12年に横井は、元々海軍技師で台湾総督府から引き抜かれて満鉄の建築課長を務め「満州の天皇」と呼ばれていた小野木孝治と同事務所を開設する。これが大正15年に、相賀が神奈川県庁舎設計競技に応募した時の職場、小野木孝治・横井謙介共同建築事務所である。

この後相賀は満鉄に復職している。そして昭和7年3月に日本の傀儡国家である満州国が成立すると、満鉄は約160人の社員を同国の政府機構確立のため首都・新京に派遣する。その一人が相賀で、国都建設局建築科長として満州国政府庁舎や職員のための住宅を建設した。

また満州国はこの頃顧問として佐野利器と相賀の満鉄以来の上司・青木菊治郎の二人を顧問に迎えている。相賀は満州国の営繕需用局営繕処設計科長兼監理科長として手腕をふるった。一徹な相賀の性格は関東軍司令部との相克を起こす。そして昭和11年に、皮肉にも神奈川県庁舎建築事務所長を務めた佐野利器の腹心・桑原栄治が営繕処長となり、相賀はその主導的地位を追われることとなる。その後奉天で民間会社(第一住宅会社)や香港総督府、大連の民間会社(福高組)に勤め、終戦の昭和20年病氣療養のた

め帰国し別府でこの世を去る。享年56歳だった。

一等から三等三席まで6名当選者がいるが、一等の小尾嘉郎以下二等二席の中村哲(建築業)、三等二席の泰井武(東京市建築局)、三等三席の大野功二の四名は名古屋高等工業の卒業生である。名古屋工業会会報(名古屋高等工業学校のOB会報)は大正15年の7月号に、「名古屋大當り」の見出しで、4名の賞金合計が1万2千円にものぼったことや、審査員に母校の教授は一人もいなかったことを報じている。このさりげない表現にも、これまでのコンペ審査に対する不信感が一般に存在していたことを暗示している。

問題となった三等一席「放熱器」の設計者、土浦亀城はこの後戦中戦後にかけて大家として活躍するが、この神奈川県設計競技でもやはり一步時代の先を歩んでいたのではないだろうか。土浦の提案は、後年の皇室博物館コンペにおいて、落選覚悟でモダニズム様式を提案したと言われる前川国男を彷彿させるものがあるが、実際には純粋モダニズム様式で応募した者がかなりいたことはすでに記述したとおりである。上位入選者の中で、土浦亀城は戦後まで建築家として名をなした唯一の者と言ってよいだろう。

(2) 土浦亀城

土浦は明治30年茨城県に生まれる。大正11年に東京帝国大学建築学科を卒業後フランク・ロイド・ライト建築事務所に勤め、在学中から参加していた帝国ホテルの工事設計に従事する。大学の同級生には岸田日出刀や小菅刑務所をデザインした蒲原重雄がいた。堀口捨巳や石本喜久治らの分離派は2年先輩であり、分離派そのものに参画はしなかったが大きな刺激を受けている。大正12年4月から同14年12月にわたりウィスコンシン州タリアセンやロサンゼルス事務所で働く。この頃の仕事仲間にR・ノイトラやヴェルナー・モーザー、ウィリアム・スミス、メンデルゾーンがいた。遠藤新やアントニン・レーモンドは同事務所の先輩にあたる。

帰国後、大正15年から昭和9年まで大倉土木(株)建築部(現大成建設)に勤務し、その後土浦亀城建築事務所を創設した。著名な作品としては、野々宮アパート、大倉別館、強羅ホテル、満州国迎賓館(長春)、土浦自邸、今村邸、土井邸などが挙げられる。

初期の住宅作品には、ライト特有の横の線を強調したものがあるが、後の作風は装飾を削ぎ落としたモダニズムスタイルを追い求めている。ライトの横に対して縦の線を強調しているものが神奈川県庁舎設計競技三等一席のデザインである。このことについて土浦亀城は興味深いことを後年語っている。日本建築家協会機関誌の「建築家」(昭和59年春期号)の大須賀常良氏及び茶谷正洋との対談の中である。

茶谷「私が大成に居たころの事務所だった大倉別館・・・」

土浦「そう、あれもやりましたね。あれはね、僕は非常に嫌いな建物です。なぜあんな物を建てたかといいますとね、その前に神奈川県庁舎の懸賞募集があったんですよ。それに僕が応募して3等かなにかで少しばかり金をもらった事があるんですよ。そうするとね、重役なんてしょうがないもんでこれは大変な収穫だと思ったんですよ。そのスタイルでこれをやれっていうんですよ。僕は県庁とオフィスビルとは

違うんだからそれはだめだといっても、いう事を聞かないんでとうとうああいうふうにやらせちゃってね。僕は非常に不満で、そんなものこんな所に建てたんじゃみっともなくてしょうがないっていったんだけどね。それであんなもの建てたんですけれども、今壊されてやっと安心しましたよ。」

図3 - 5 2 大倉別館



出典 大成建設提供

神奈川県庁舎コンペ三等一席（図2 - 19、本稿91頁）と大倉別館は似ていると言えば確かに縦のラインがルーバー状の袖壁で強調されているところだが、土浦亀城自身の告白がなければ気がつかないものだろう。大倉別館は銀座3丁目4番地にあり、鉄筋コンクリート造6階、地下1階で延べ1050坪あったが、この対談の時点ですでに取り壊されていた。

大倉別館は写真で見ると、土浦が言うようなオフィスビルとしてスタイルが合わないとは思えない。実際これに似たオフィスビルは日本の市街地でよく見かけるものだ。三等一席をとった県庁舎のデザインは、当時の時代が要求したモニュメント性に欠けており、とって付けたような塔状部分は、全体のバランスともなじんでいない。雑誌での発言は、土浦らしい謙虚な態度からきていると筆者は考える。

土浦の妻・信は吉野作造の長女である。土浦は青春時代の師であるライトの作風は受け継いでいない。生涯をライトのエピゴーネンたらんと徹した遠藤新とは一線を画している。しかし二人は共に東京帝大のキリスト教青年会に所属していた。この会の理事長をしていたのが大正デモクラシーの旗手である吉野作造だった。吉野は週1回自宅開放日を設けており、学生達は吉野に面会することができた。はじめは遠藤が8歳年下になる土浦を連れていったようだ。吉野は大正9年遠藤に書斎の設計を頼むなどしている。

当時吉野には女6人、男1人の子供がいた。長女・信のハートを射止めたのが土浦であった。土浦は大正10年9月に信と学生結婚し、しばらく吉野宅に同居している。翌大正11年に帝国ホテルがほぼ完成し、ライトのロサンゼルス事務所に信を伴い出発し

ている。信も夫のドラフトを手伝っていた。

昭和9年に個人事務所を開設し、土浦の代表作となる九段の野々宮アパートなどを設計している。野々宮アパートには岡田嘉子も住んでいた。しかし国内の設計需要はめっきり落ち込んだ。土浦は中学時代旅順で生活しており、満州には友人知己も多かった。特に吉野作造の弟の吉野信次は第一次近衛内閣の商工大臣を務めた後、満州重工業の副総裁をしていた。そこで昭和12年に新京（現在の長春）に事務所を開設し、満州国迎賓館などの作品を残している。

土浦亀城は平成8年98歳でこの世を去る。事務所は既に昭和44年に閉鎖していた。しかも戦後は特に目立った活躍をしていない。このことを後世の建築史家達は土浦亀城の謎あるいは悲劇と呼んだりしている。実際初期の白を基調としたモダニズムデザインは今日でもファンが多い。昭和10年の土浦亀城自邸（東京都品川区）は他人の手に渡ってはいるが、東京都の有形文化財に指定され、見学者が絶えることがない。

元JIA専務理事の藤井正一郎氏はホームページ上で、行き過ぎたモダニズムの採用は（具体的には木造に陸屋根を採用したりしたこと）致命的雨仕舞いの欠陥を惹起したことが土浦のトラウマになっていたと推測している。このことは前述の対談で土浦自身が失敗であったことを認めている。

茶谷「日本で始めにトロッケンバウ（乾式工法のこと、筆者注）という構法で、ヒサシが出ていないというのをお作りになったということは大変な冒険だったのではないのでしょうか。」

土浦「冒険ですよ。大変な冒険だけれども、こっちも若さにまかせて冒険をやったんですがね。だから失敗もずい分あります。」

茶谷「雨漏りなんかですか？」

土浦「僕ははじめね、ああいうフラットルーフの家を作った時に、コンクリートだって同じなんだからコンクリートと同じアスファルト防水をやればいいじゃないかという考えでやったんですよ。中略 やっぱりしくじるんでしょうね、そういうのは。」

また藤井氏は土浦事務所から育った河野通祐氏の話として「初めの頃の建築のオーナーは全て土浦さんの知り合いの知識人、文化人で、土浦さんの人柄をよく理解した上での依頼で、企業、組織となり、建築が経済の対象になったことが先生にとっての悲劇だったのではないか」とのコメントを紹介している。建築家がプロフェッションとして生き抜くことは、実は容易でない。地縁、血縁、友人などを介してのみ仕事を得ていくことには自ずと限界がある。財閥や公共団体に政治家や有力者を頼って道筋をつけることにプライドが許さないまでも、積極的になれない建築家は沢山いたはずである。この意味で小尾嘉郎も土浦亀城に似ている。

(3) 泰井武

次に三等二席に入った泰井武を紹介する。小尾嘉郎と同じく、名古屋高等工業を卒業して東京市に就職した一人である。

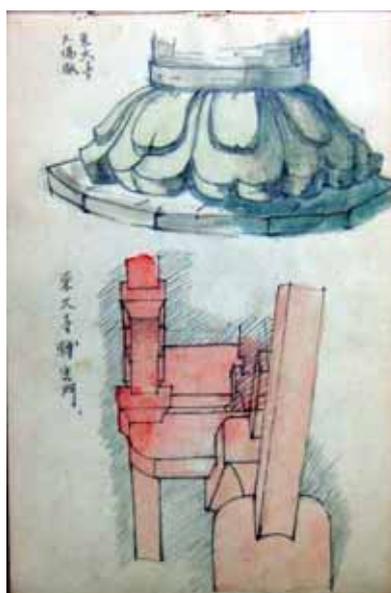
図3 - 5 3 名古屋高等工業時代の泰井武



出典 姪の大崎好子氏提供

泰井武は明治34年10月8日、兵庫県加東郡河合村新部（現在の小野市）で、父・常太郎、母くいに二男として生まれる。小尾嘉郎の三歳年下である。泰井家も素封家で、長兄は学校長、弟は医師となるインテリ家庭であった。大正9年に県立小野中学（現在の県立小野高校）を卒業し、小尾と入れ替わる形で大正10年4月に、第17期生として名古屋高等工業建築科に入学する。そして大正13年に卒業して、発足したばかりの東京市臨時建築局に勤務する。当然同窓生として嘉郎との付き合いはあったろうが、どれほどのものであったかは不明である。

図3 - 5 4 名古屋高等工業3年の時のスケッチ帳から



出典 大崎好子所蔵

就職して二年目の大正15年に神奈川県庁舎懸賞設計競技に応募し三等二席に入る。古典主義様式と当時はやりの分離派風がミックスされたもので、この類の応募案は多かった。実は応募案中で、大胆に日本建築風を取り入れたのは小尾案だけである。

昭和2年6月に東京市を退職し、すぐに第一銀行建築課に勤務し、翌3年、「大崎はな」と恋愛結婚する。2人の間に生涯子供はできなかったがおしどり夫婦だったという。第一銀行の建築課長が、後年銀行建築の名手と呼ばれた西村好時（明治45年東京帝大建築卒、横浜市出身）である。横浜馬車道と本町通りの交差点に面して、トスカナ式オーダーを持つ第一銀行横浜支店（現在は横浜銀行）が建っていた。「横浜みなとみらい」の関連再開発事業で解体されたが、幸い玄関部分は移転保存された。この銀行は昭和4年に建設されているので、泰井も何らかの関わりを持ったかもしれない。

昭和6年に西村が独立して建築事務所を開業すると、請われて泰井も翌7年に西村事務所に移った。この事務所で銀行のほか、事務所、百貨店、住宅、工場などを手がける。

昭和9年に静岡県庁舎の懸賞設計競技が行われ、泰井は中央の塔やパラペットに日本瓦を使った案を提出し、一等（賞金四千元）を勝ち取る。審査委員長は10年前の神奈川県庁舎コンペと同じ佐野利器で、審査委員の中で内田祥三、大熊喜邦、も共通している。選定に当たっては、明治期の辰野金吾にも比肩される大正・昭和前期建築界の指導者となっていた佐野利器の意向が強く働いていたと考えられる。泰井の案は、同工異曲の応募案が多くそれなりに熾烈な競技であったろう。

図3 - 55 静岡県庁舎一等当選案パース



出典 大崎好子氏提供

実施設計は審査委員の一人である中村與資平（浜松市出身、明治38年東京帝大建築卒）が担当した。中村も日本占領下の朝鮮や旧満州を舞台に活躍した建築家の一人である。静岡県庁舎（現在本館と呼ばれている）は方形の塔屋など全体的に泰井の案を踏襲

しているが、玄関廻りはかなり変えられている。また小尾のように、泰井が静岡県に招聘されることもなかった。

またこの間に愛知県庁舎が建設されている。昭和10年10月に着工し、昭和13年3月に完成している。これについては後述するが西村好時・渡辺仁案が基になったとされている。この作品はヨーロッパ古典様式を得意とした西村の作風とは異質なもので、当初筆者は和風を得意とした泰井がコミットしたのではないかと考えていた。しかし近年の名古屋市立大学の瀬口教授の丹念な調査の結果、どうも西村の案はかなり現在の帝冠様式スタイルとは異なった提案（多分古典様式）をしており、むしろ渡邊仁の案が主体になったものらしい。⁵³⁾

翌昭和10年の朝鮮総督府始政25周年記念博物館懸賞競技にも泰井は応募し、佳作に入る。しかるに日本は太平洋戦争に突き進んで行き、個人の建築事務所経営は厳しいものとなり、昭和19年に西村好時建築事務所を退職する。

昭和19年10月1日付けで後鹿島建設設計部に採用された。43歳の時である。その後昭和42年まで勤務している。当初設計部の採用であったが、間もなく工事管理部門に移っている。当然創作活動はしていない。昭和46年以降は片山建築事務所で軽易な管理業務を数年手伝うなどして引退した。明治、大正、昭和、平成と生き抜き、平成9年8月12日この世を去った。享年96歳。晩年は望郷の念が高かったが、決して帰郷しなかった。なお「泰井」姓は「やすい」と読むが、実家では「たいい」と読む。この辺りにもいろいろ憶測は可能であるが、今となっては闇の中という他はない。今は港区三田の明福寺で、愛妻「はな」と仲良く眠っている。

泰井に子供がいなかったため、世田谷区経堂の家を姪御さんが継いでいる。建築関係の職業についての親族もいないため、大半の資料は処分されていたが、その猛勉強振りを示すノートやスケッチ帖、フランク・ロイド・ライトの図集などが保存されている。泰井の息づかいが聞こえてくるようなこれら資料を、さすがに捨てかねたのだと筆者に姪御さんは言われた。余談であるが、経堂の泰井宅に隣接して元総理大臣の鈴木善幸邸がある。敷地の一部を鈴木善幸氏側に売却しているとのことだ。経堂駅北側のこの辺り一帯の道路はほとんどが二項道路と呼ばれる復員四メートル未満での住宅密集地で、SPも警護に大分苦労したという。

第3章 註

- 1) 高根町役場及び須玉町役場総務課のご教示
- 2) 郷土史家、大正7年3月生、山梨県立師範学校卒、昭和52年明野中学校長を最後に退官、須玉町町史編纂委員
- 3) 須玉町史通史編第1巻、須玉町、2002年、P391
- 4) 3)に同じ、P399
- 5) 須玉町史史料編第2巻、須玉町、1998年、P888
- 6) 日本歴史地名大系19・山梨県の地名、平凡社、1995年11月
- 7) 甲府市街全図、山梨県図書出版協会、明治42年3月、
- 8) 山梨百科事典、山梨日々新聞、1989年
- 9) 学校法人・進徳幼稚園創立100周年記念誌、桜井京子、平成10年10月
- 10) 6)に同じ
- 11) 横浜近代史辞典、横浜通信社、大正6年5月、若尾幾三・幾太郎の項
- 12) 9)に同じ
- 13) 山梨県教育史、山梨県・赤岡重樹、大正6年
- 14) 山梨大学学芸学部沿革史、山梨大学学芸学部、昭和39年6月、P54
- 15) 山梨大学附属小学校竹本入試課長のご教示(平成12年7月)
- 16) 小尾嘉郎「小学5年・作文ノート」、神奈川県立公文書館所蔵
- 17) 小尾欣一氏の証言
- 18) 小尾嘉郎・明治43年冬季休暇日記、12月25日、神奈川県立公文書館所蔵
- 19) ふるさとの思い出写真集 明治・大正・昭和 甲府、国書刊行会、昭和53年11月
- 20) 18)に同じ、1月1日
- 21) 植松光宏：山梨の洋風建築、甲陽書房、昭和52年12月
- 22) 小尾八郎・菊三の甲府中学学生手帳から読み取れる。神奈川県立公文書館所蔵
- 23) 小尾欣一氏の証言
- 24) 光鯨会(名古屋工業大学建築学科OB会)HP
- 25) 西澤泰彦：図説満鉄、ふくろうの本・河出書房、2000年8月、P30及び西澤泰彦：海を渡った日本人建築家、彰国社、1996年12月、P57
- 26) 武蔵野市史、市史編纂委員会、1970年3月
- 27) 26)に同じ
- 28) 福本英二・渡辺俊一・定行泰宏：池田宏伝記、都市計画のパイオニア、都市計画協会、P181~182
- 29) 28)に同じ
- 30) 東京女子大学の80年、東京女子大学、1998年4月、P122
- 31) 瀬口哲夫：名古屋中央建築界と米田兵三郎、C&Dvol26、1995年3月、P75
- 32) 東京日日新聞と朝日新聞 大正15年6月22日、東京日日新聞 昭和3年11月1日
- 33) 東京日日新聞 大正15年6月22日

- 34) 横浜貿易新報 大正15年7月15日
- 35) 神奈川県庁舎実施設計図、マイクロフィルム、大林組社史調査室提供
- 36) 瀬口哲夫:(鈴木禎次生誕130年記念展)鈴木禎次及び同時代の建築家たち、2001年1月、P96
- 37) 「庁舎開庁式伺い原議」に小尾嘉郎の名前はない、神奈川県立公文書館所蔵
- 38) 村松貞次郎:日本建築家山脈、鹿島出版会、1965年10月、P22
- 39) 小尾嘉郎のコメント部分の切り抜き、神奈川県立公文書館所蔵
- 40) 越沢明:東京の都市計画、岩波新書、1991年 P146~149
- 41) 金沢文庫復興30年誌、神奈川県立金沢文庫、P7~8
- 42) 東京日日新聞 昭和8年3月8日
- 43) 住宅営団例規類集(昭和16~18年)
- 44) 同潤会十八年史、宮沢小五郎、昭和17年9月、P2
- 45) 畔柳安雄:住宅屋30年、私家版、昭和44年11月、P10
- 46) 武蔵野市史、武蔵野市、1970年3月、P662~663
- 47) 市浦健が宮沢小五郎の出身を秋田としたのは秋田県に出向していたこととの混同であろう。
- 48) 45)に同じ
- 49) 46)に同じ
- 50) 大本圭野:幻の住宅営団、日本経済評論社、2001年7月
- 51) 会計検査院HP、決算検査報告データベース、1948~49年度決算報告
- 52) 渋江幸雄:建築士第一号渋江菊蔵の思い出、建築士、(社)日本建築士会連合会、第53巻第639号、2005年12月号、P16
 渋江氏によれば、第一号は昭和26年6月21日付けで一級建築士免許証が発行されている。
- 53) 瀬口哲夫:官庁建築家・愛知県営繕課、C&D122号、2000年夏、P50